

第2部 実践編

「学校支援ボランティア」の指導・評価システム

第3章 静岡市、静岡大学の実践事例報告

第1節 静岡市「学生スクールボランティア」の概要

「学生スクールボランティア」の配置における教育委員会・大学・学校の連携について

1. 趣旨

静岡市立幼稚園、小・中学校（以下「学校」という。）の教育課程実施の充実を支援するとともに、教員志望者の開拓及び資質・能力の向上につなげる。

2. 実施の内容

学校が自校の教育活動（教育課程内の活動及びそれに準ずる活動）上、学生の補助を必要とするものについて、学生が主体的な意欲に基づき「学生スクールボランティア」として活動を行う。

3. 実施の方法

(1) 学生スクールボランティアの募集

- ① 静岡市教育委員会（以下「教育委員会」という。）は、各園・各小中学校に必要とするスクールボランティアの掲載依頼を求める（前年度3月上旬締切）。
- ② 教育委員会は、連携大学（以下「大学」という。）に「静岡市学生スクールボランティア紹介リーフレット」及び「学生スクールボランティア募集一覧表」を送付する（前年度3月中旬）。

※ 静岡市教育委員会は、現在以下の8の大学・短期大学と連携しているが、他県の大学生についても同様の手続き及び注意事項に従い参加することができる。

【連携大学】

- ・ 静岡大学
- ・ 静岡県立大学
- ・ 常葉学園大学
- ・ 東海大学海洋学部
- ・ 静岡英和学院大学
- ・ 常葉学園短期大学
- ・ 東海大学短期大学部
- ・ 静岡英和学院大学短期大学部

- ③ 大学は、4月当初の学生向けオリエンテーションにおいて(1)②において送付された資料を配布すると共に、掲示物等を使い学生に広報する。
 - ④ 教育委員会は、教育委員会ホームページに、募集一覧を掲載する。
 - ・ ホームページの更新は随時、教育委員会が行う（毎月末を予定）。
- (2) 学生スクールボランティアの派遣
- ① 学生は、自ら支援活動を希望する場合、「静岡市学生スクールボランティア申請書」【様式3】の上段（以下「申請書」という。）に必要事項を記入し、大学窓口に提出する。

【各大学窓口】

- ・ 静岡大学…教育学部附属教育実践総合センター
- ・ 静岡県立大学…学生部学生課
- ・ 常葉学園大学…教職センター
- ・ 常葉学園短期大学…教務課
- ・ 東海大学海洋学部…清水教学課
- ・ 東海大学短期大学部…静岡学務課
- ・ 静岡英和学院大学・短期大学部…ボランティアセンター

② 大学は、希望する学生に教育委員会作成のリーフレット裏面に書かれている「注意事項」を説明し、学生に注意事項を順守して活動する意思があるとみる場合、学生の申請を受理する。

③ 申請を受理された学生は、学校に連絡する。

(3) 学生スクールボランティアの決定等

① 学校は、申請書を提出した学生に対し、支援活動内容の説明を行い、管理職による面接の上、活動に適切と判断した場合、学生に活動の依頼を決定する。

※ 各大学（の教員）に学生の派遣を直接依頼しない。

※ 自校の教育実習生をそのまま学生スクールボランティアとして採用したい場合も、必ず【様式3】を学校教育課に提出する。

② 学校は、学生の採用を決定した後、学生の在籍する大学あて「静岡市学生スクールボランティア採用決定報告」【様式3】を学校教育課に提出する。

(4) 学生スクールボランティアの活動

① 学生スクールボランティアは、活動を開始する。なお、学校と協議の上、継続したり終了したりすることができる。

4. 学生スクールボランティアの活動

(1) 支援活動は、学校の教育活動（教育課程内の活動及びそれに準ずる活動）の補助とする。主として、次の内容に分類する。

- ア コンピュータ学習や理科実験など特別な技能を必要とする教科指導の補助
- イ ア以外の教科指導の補助など
- ウ 普通学級における特別な教育的支援が必要な児童生徒への補助
- エ 養護学級における障害のある児童生徒の学習・学校生活への支援
- オ 外国人児童生徒の学校生活における相談、コミュニケーション支援・通訳
- カ 放課後における児童生徒の学習相談・遊び
- キ 図書の読み聞かせ・学校図書館の運営補助
- ク 部活動・校外教育活動の補助など
- ケ その他

(2) 支援活動の時間帯、内容、期間について、学校は学生に説明し、学生の了解の上に決定するものとする。ただし、支援内容は、教職員の補助とする。

5. 学生スクールボランティアの服務等

(1) 学生スクールボランティアの服務についてはリーフレットにある【学生スクールボランティアに関わる注意事項】を順守するものとする（【学生スクールボランティアに関わる注意事項】については、大学・学校にて学生に説明する）。

(2) 災補補償については、大学が、ボランティア保険等に参加することを義務づけることと

する。

- ※ この他、学生スクールボランティアには、学校教育課が取りまとめて加入する「全国市長会市民総合賠償補償保険」が適応される。〔ボランティア活動に対する補償保険〕
- (3) 学生スクールボランティアが、自己の都合により、決定した活動期間の途中で活動を辞任しようとする場合には、事前に学校に連絡し了承を得なければならない。大学窓口への連絡時期・方法については大学の指示に従う。
- (4) 学校が本活動の趣旨に照らして学生が著しく適切さを欠くと判断された場合、活動依頼期間であっても、本人及び大学窓口連絡した上で、任を解くことができる。また、期間を延長しようとする場合は、本人が大学窓口連絡をする。
- (5) ボランティア活動中に緊急の問題が発生した場合に備えて、学生スクールボランティアと各学校の担当者は連絡体制を確立し、必要に応じて所属大学、市教育委員会学校教育課に連絡をとる。

6. 支援活動推進体制の整備

- (1) 本活動推進のために、学校サポート推進協議会（以下「協議会」という。）を設置する。
- (2) 協議会は、教育委員会、連携大学及び関係者により構成し、当分の間、教育委員会学校教育課に事務局をおくものとする。
- (3) 協議会は、必要に応じて開催し、当分の間、事務局が招集する。

7. 本事業についての問い合わせ先及び事務局

静岡市教育委員会 学校教育課 企画管理担当
電 話 054 - 354 - 2533
F A X 054 - 354 - 2481
〒424-8701 静岡市清水区旭町 6 番 8 号
メールアドレス gakkyo@city.shizuoka.lg.jp

※なお、「学生スクールボランティア」に係る資料は、本報告書の「第3部資料編」に掲載した。

(静岡市教育委員会学校教育課)

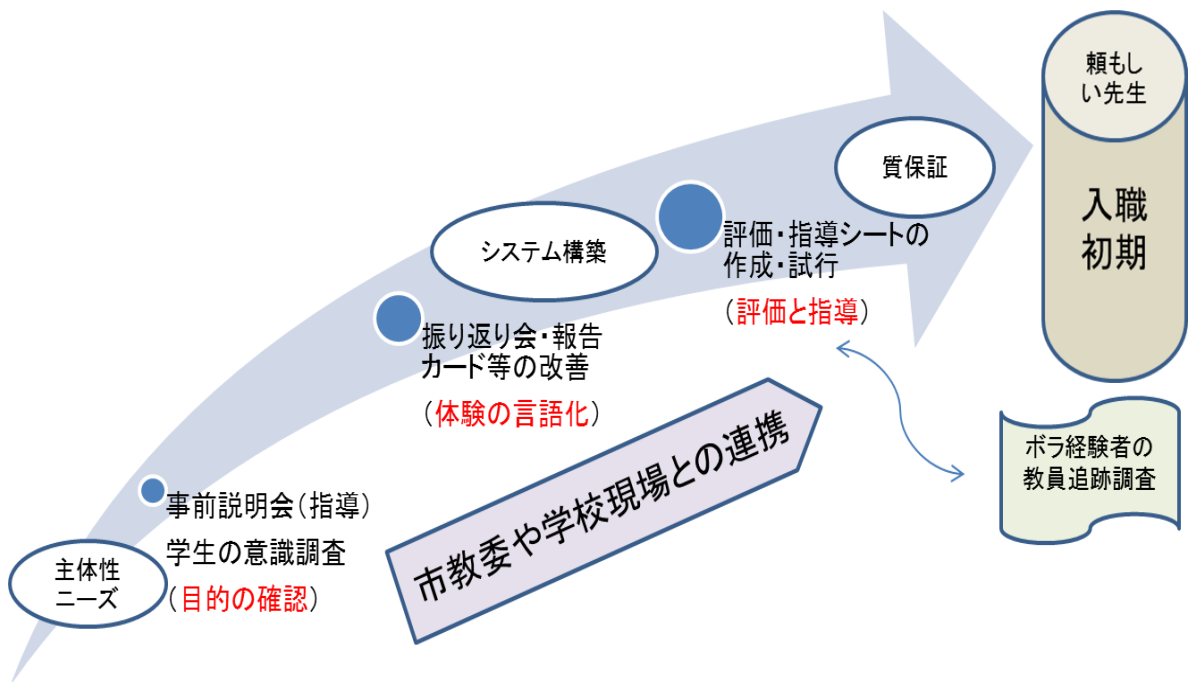
第2節 静岡大学の実践事例報告

1. 静岡大学の学校支援ボランティアの概要

平成10年以降、全国の教員養成系の大学・学部においては、学生を学校現場に派遣する現場体験活動や、学校からの要請に応じて学生を派遣する学校支援ボランティアが広がりを見せていった。当時、静岡大学でも、個々の大学教員と学校現場とのつながり等を生かして、学生を学校現場へ派遣したり、ボランティアとして学生が小・中学校で活動したりしていた。平成15年前後には、本学部の附属教育実践総合センター（以下、本センター）を窓口にして、学生を近隣の小・中学校へ学生を派遣する流れができていった。静岡市教育委員会とは、平成18年度に連携協定を締結し、その後、静岡市の学校への学生の派遣は増えていった。派遣される学生は、原則3年生以上とし、平成24年度実績では、派遣機関数が54機関（幼、小、中、高、特支、その他計）、参加学生数がのべ243名となっている。派遣先での活動内容としては、授業中における教師の補助、児童・生徒に対する学習・個別指導支援が中心となっているが、放課後における学習指導や部活動指導の補助、小・中学校の夏休み期間中の補習学習等の補助、運動会等の行事指導の補助等、多岐にわたっている。近年では、学生の派遣は、焼津市、藤枝市、島田市、富士市などでも行われているが、やはり活動の中心は静岡市となっている。なお、本センターでの単位認定は、平成21年度から行われている。

2. 支援システムの構築に向けて

図表1 構想図



ステップ1 学生の意識調査・事前説明会（指導）

ステップ2 振り返り会・報告活動カードの改善

ステップ3 評価シートの作成・試行

学生の活動や学びを支援するシステムの新たな構築を考えたのは、近年の学生や活動校のボランティアに対するそれぞれのニーズの多様化、市町教育委員会との連携の推進があったからだ。近年では、WEB を活用したボランティア登録システムの導入、本活動の「手引き書」の改訂、学生が（任意で行う）中間報告の機会等を行ってきた。それらを生かしながら、本年度の支援システム構築に関して、3つのステップを考えた（図表1）。ただし、ステップ2・3については、順番は入れているが、同時にあるいは、連関させて進めていくこととなった。また、「主体性」「ニーズ」「システム構築」「質保証」をキーワードとした。

「主体性」「ニーズ」については、本活動は、そもそも学生が自らの意志で参加するかどうかを決め、どのような活動を行いたいのかも決めるといふ、学生の主体性や自発性を尊重してきた。今回は、「主体性」等、本学の特長である学校支援ボランティアの在り方も確認する事前指導の充実と、学生のニーズを知るための意識調査を行った。

「システム構築」については、具体的な仕掛けとして「振り返り会」の試行、そして、将来的には、学生、大学教員、現場の教員の三者も活用することができる「評価シート」の開発を中心に据えた。本センターとしては、学生がボランティアに行くことだけに終わらない「付加価値」の創出を目指した。振り返りについては、現場の教員の熱意や好意により、学校現場でも振り返りの機会をもつこともあるが、今回は、大学で行う振り返り会の在り方の検討から始めた。

「質保証」については、大学における教員養成としての質保証という視点があるが、本年度、静岡市の教育委員会や教育センターの指導主事との懇談の中で、本活動が、教員としての入職後とのつながりをもつ可能性があるという視点も生まれてきた。現時点で、学校支援ボランティアが入職後と直接につながっていることが明らかになったわけではないが、入職初期を見据えた学生の「質保証」という視点で、本活動の位置づけの一面を考えることとした。

3. 本年度の取り組みについて

本センターで学校支援ボランティア事業に関わる教職員は、センター長（全体統括）、専任教員（学生担当）、事務職員（連絡事務）の3名である。本年度は、本センターのもう一人の専任教員や学部の教員、教職支援室の実務家教員の協力を得た。図表2に、主な取り組みをあげる。

図表2 主な取り組み

基本準備

- Web を活用した学生のボランティア登録（学生の基本情報、希望活動内容、希望地域 等）
- 「ボランティアの手引き」冊子の改訂（Q&A 項目、申し込みシート、報告カード等）

ステップ1

- ボランティアの「事前説明会・相談会」の充実（4月に複数回、その後毎月第3木曜日）
- ボランティア登録をした学生に対する質問紙調査（きっかけ、期待、志望意欲、資質能力）

ステップ2

- 参加学生の年3回の報告カードの活用
- ◎教職支援室との協働による新たな「振り返り会」の運営

ステップ3

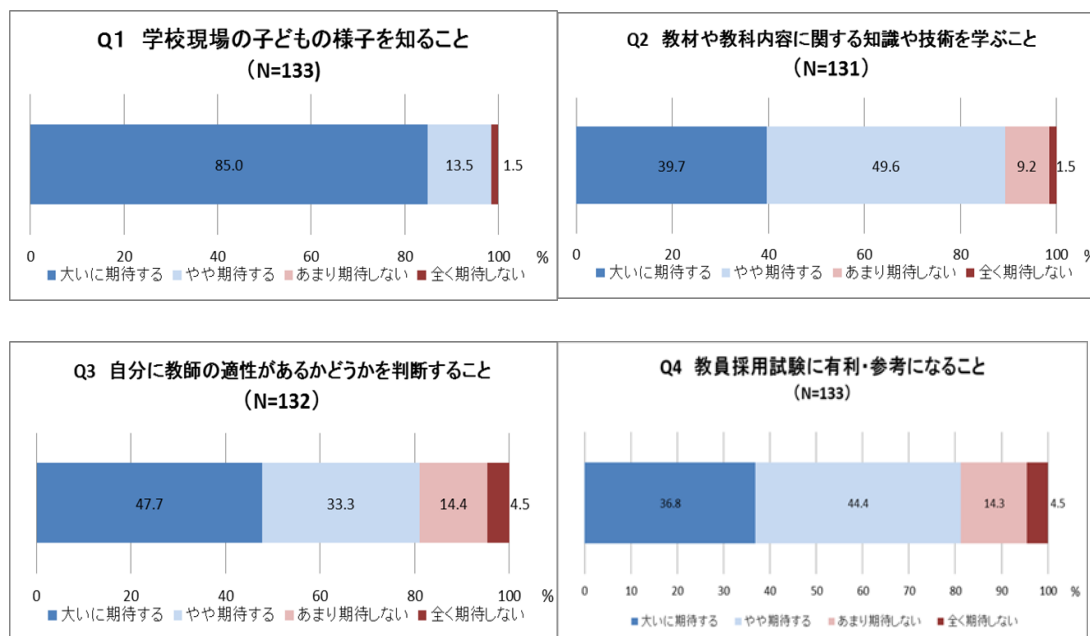
- ◎評価シートの開発（作成・試行）

図表 2 の「基本準備」の Web を活用しての学生の登録や「ボランティアの手引き」冊子の改善については、学生の管理、事務手続きの改善・効率化をねらったものである。Web により、登録は簡易化され、また、ボランティアの手引きは、いったん活動に入った後では、何かあった時に学生がすぐに見返すことができる手引きとなっている。活動記録のページも増やした。

「ステップ 1」では、事前説明会の充実や学生への質問紙調査を行った。事前説明会では、学生支援ボランティアの現状や教育実習との違いを、担当者より直接学生に伝えた。また学生が参加しやすいよう、年度当初に複数回開催した。さらに、手続き方法だけでなく、過去に参加した学生の様子も紹介し、学びとしての学校支援ボランティアの意識向上を意図した説明会とした。質問紙調査は、ボランティア登録した学生に行った。内容は、「活動へのきっかけ」「活動への期待 *10 項目を、各 4 件法にした」「教職志望意欲」「現時点での教職に関して身に付けている資質・能力（自己評価）*7 項目を各 4 件法の自己評価」を問うた。本年度、4 月から 7 月までの登録した学生の「活動への期待」の一部を、図表 3 に載せる。ボランティアに参加しようとしている学生が、どんな期待で活動に参加しようとしているのかを把握し、今後のボランティア全体の運営、特に、学生の学びを支えるための取り組みに生かしていく基礎データとして活用を考えた。図表 3 からは、子どもの様子や授業について知りたいという、学生の率直な期待が、あらためて確認できた。また、Q4 については、8 割以上の学生が期待していることから、採用を見据えた正直な意見が反映されている。

図表 3 ボランティア登録時の学生の意識（調査の 1 部）

「これから活動するにあたって、それぞれの項目についてどれだけの期待があるか」 Q1～Q4



「ステップ 2」の報告カード（図表 4）については、「ボランティアの手引き」冊子の巻末に、切り取り式で載せた。学生は、以下のような内容を記入し報告した。その内容の一部を、箇条書きで記す。

(活動状況)

- ・毎週、1年生のクラスをローテーションしながら活動しています。作業が遅れている子どものフォローをやりすぎないように、慎重に行っています。(小)
- ・教育実習と違って、より臨機応変に子どもに対応することが必要で、難しいことも多いです。しかし、先生や子どもと触れ合う中で学ぶことが多くあります。(小)
- ・どの子どもにつくかは決められていませんが、クラス全員と一日一回は話すよう心掛けています。生活科の授業等で、地域や保護者の方とも交流ができました。(小)
- ・毎週金曜日に理科の授業に入っています。学年・クラスも毎回変わるので、授業の開始直後になにをやるかを把握するのが大変ですが、できれば予習をしていきたいです。(中)

(子どもから学んだこと)

- ・「信頼関係を築くことが、話を聞いてくれることにつながる」ことを子どもから学びました。そのため、休み時間も含めて、子どもの話を一生懸命聞くようになりました。(小)
- ・教育実習で担当した3年生と比較して、4年生になると、「自分たちで動く」ことができるようになると感じました。担任の先生方の指導のスタンスがあるのかもしれない。(小)
- ・授業中に出される問題が分かる生徒と分からない生徒に差があり、それを隠したがる生徒もいれば、聞いてくる生徒もいます。声をかけてこない生徒に関わっていきたいです。(中)

(教員から学んだこと)

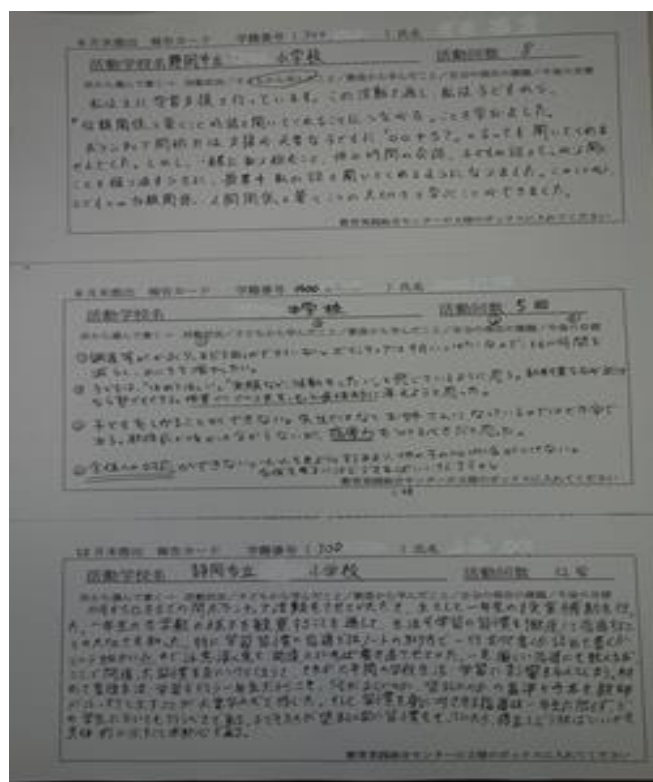
- ・主として、1年生の授業補助を行っている。担任の先生が、生活や学習の習慣を徹底的に指導することをあらためて知りました。(小)
- ・低学年だからかもしれませんが、何が正しいのか、望ましいのか基本や手本を、教師がはっきりと示すことが必要なのだと感じた。(小)
- ・勉強に向かわない子どもに対して、その子ができることを多くして、活躍できる場を作っている先生はすごいです。(小)
- ・英語の授業を通じて、国際理解を促す題材の有効な活用方法を学ばせていただいた。(中)

(自分の課題・今後の課題)

- ・特別に配慮を必要とする子どもは、すねたり、イライラしたりすることが多い。その時の子どもの様子の把握や先生のかかわりを、これから学んでいきたい。(小)
- ・席を離れてしまう子どもなどに対して、根気強く向き合い、支援が必要だと思います。(小)
- ・友達とうまくいかない子どもに対して、目を見て話をして思いを伝えたが、伝わったのかわからない。叱り方やほめ方を学んでいきたい。(小)
- ・子どもをしかることができない。先生ではなくお姉さんになっているので不安である。(中)
- ・一人一人を見ようとするあまり、他の子どもへのヘルプができない。全体を見ていくことを心掛けたい。(中)

本カードでは、学生の活動の実態把握以外にも、学生の活動上の困っていることや悩み等の内容を把握することを想定した。カードの提出を任意(年3回)としたため、7月までは、カードによる報告(35枚)が寄せられたが、10月以降はカード自体の活用は減った。ただ、現実的に活動校との調整や活動で困ったことがあった場合は、学生が直接、本センターを訪れたり、担当者へメールと送ったりすることはしばしばみられた。

図表4 〈報告カードの一例〉



ステップ2のもう1つの「振り返り会」とステップ3の「評価シート」の作成・試行については、本取り組みの重要な部分であり、次項でその取り組みについて述べる。

4. 振り返り会の運営と評価シートの準備

本年度の本センターにおける学校支援ボランティアの振り返り会は、試行として7月、11月、12月にそれぞれ10人前後の学生が参加して行われた。7月31日は60分、11月13日は70分、12月18日は80分の会となった。

本年度の振り返り会の準備として、7月に、担当者と教職支援室の実務家教員は、次のような視点で議論を行った。

- (1) 参加学生のターゲット
- (2) 何のための会なのか
- (3) 今後、どんな会にしたいのか

「参加学生のターゲット」については、体験における省察を、今後の自己の活動に生かそうとする学生とした。具体的には、①定期的、または継続的に、週一回程度の学校支援ボランティアを行っている学生、②学校や学級の様子に応じて、多様な支援サポートを行っている学生、③学生の心構えとして、振り返りの会でも主体的に学びたいという気持ちがある学生、とした。

「何のための会なのか」については、①ボランティア活動に対する関心・意欲を、より高める、②学校現場での活動における、学生個々の課題解決のヒントをつかむ、③今後の活動に生かすため、客観的な視点で自己の活動を振り返り、その記録を残す、というねらいを考えた。それを、実現するための手だてとして、振り返り会での活動の「言語化」や、シートを活用した活動の「客

観化」、そして、学校現場での経験豊かな実務家教員の助言を据えた。

「今後の、どんな会（内容）にしたいのか」については、①各自の活動校の様々な経験を、紹介したり聴きあったりすることができる会、②大学教員も遠慮なく参加できる会、③会を重ねる中で「緩やかなネットワーク」ができる会、④振り返りの記録が「学びの足跡」として残る会、である。これらが本年度中、その気運が高まることを強く期待して活動を進めた。

次に、評価シートの検討について触れる。参加学生は、2 か月程度の自分の活動を振り返って記入することとなる。シートの原案は、以下のことを意識しながら、本センターの専任教員と教職支援室の実務家教員と、何度も検討する過程を踏んだ。

- (1) 様々な場面での学びや自己の活動を、記入できるようにする。
- (2) 20 分程度で記入できるシートにする。
- (3) シートを活用して、自他の体験や学びを語ったり知ったりする。

評価シートの原案では、縦軸に、教師の必要な資質・能力に関わる項目を 5 つ載せ、横軸に、態度等、知識等、人間関係、地域・保護者という項目を設けた。横軸に関しては、学生が接するであろう、気付くであろうと思われる内容順に左から右へと項目を並べた。ただし、項目すべてを埋めて書くことを求めないということにした。学校全体の活動の中で、自分の特に参加している活動の位置や視点を、シートを通して客観視できることをねらった。

検討の末、7 月 31 日に実際に用いる評価シート（図表 5）は、各項目の文言を、実務家教員の助言を受けて学生がとらえやすいように、一部修正・補足した。

図表 5 7 月の評価シート

【学校支援ボランティア 評価シート 7/31】 名前 _____ 専修 _____

活動で **気付いたこと**を、具体的に書いてみよう。 A 自分 B 仲間から (すべてを埋める必要はありません)

学校名・学年	先生方の態度やふるまい	先生方の知識・技能・方法	先生方と同僚(教員集団)	先生方と保護者(地域)
1. 教師の使命観・責任感 ※守るべきこと、しなければならぬこと				
2. 社会性や対人関係 ※学校に限らず、教員・社会人として				
3. 子ども理解				
4. 学級経営				
5. 授業実践				

また、原案にあった「現時点で、何が身についているか、何かできるようになったかを具体的に書こう」については、現時点での学生の「資質・能力」を書くことである。実際の学生の現場での活動は、教師の支援や子どもの活動に参加するようなものが多く含むので、記入するときに困ってしまうという意見が出た。そのため、当日用いた評価シートでは、「活動で気付いたことを、具体的に書いてみよう」という問いかけにした。また、振り返り会中に、仲間から得た視点とも書けるよう、「B 仲間から」という文言も付け加えた。

5. 振り返り会と評価シートの実際と改善

1 回目の振り返り会は、7月31日に行った。参加学生は、3・4年生の12名であった。そのうち1名は理学部の学生でボランティアを行っている学生であった。なお、事前に学生にメールを送り参加を募った。教員は、担当者の筆者と、教職支援室の実務家教員1名が参加した。内容は、下記（図表6）の通りである。

図表6 第1回振り返り会 概要

日時	平成25年7月31日	13:10~14:10	場所	教職支援室（教育L棟1階）
内容	「5~7月の活動の振り返り」			
1	自己紹介			
2	振り返り会について（担当者）			
3	各校の報告・振り返り *2グループに分かれて30分間程度			
4	代表の学生の感想			
5	終わりの話（実務家教員の先生） 評価シートの記入後に、解散			

全体の進行は、担当者の本センターの専任教員が行った。また、「自己紹介」の後の「振り返り会について」は、担当者より、本年度の振り返り会に対するねらいと、評価シートの記入の目的について10分程度話をした。評価シートについては、実際のを渡し、会終了後に記入してもらうことを伝えた。その後、2グループに分かれて、各校の報告等を行った。今回は、参加学生の活動校が小学校、中学校各6名ずつであったので、小・中にわかれて報告を行った。実務家教員は小学校のテーブルに、筆者は中学校のテーブルに座った。事前に、基本的には聞き役であることを確認していた。学生たちは、他の活動校の様子や事例に、興味深く耳を傾けると共に、共通する課題などがあると、話し込むこともあった。

小学校のグループでは、後半に、特別に支援が必要な子どもたちの話題になり、実務家教員が助言も交えて話をする機会をもった。中学校のグループでは、教科の専門的な話題、クラスによる雰囲気の違い、生徒とのかかわりについて話題となった。30分を予定していたが、あっという間に時間が過ぎてしまった。各グループの学生の話のあと、実務家教員がまとめの話をした。学生たちは、その後も部屋に残り、話を続けていく学生もいた。1回目の振り返りの会では、グループにおける話し合いの時間の短さと評価シートにおける記入の難しさが課題としてあがってきた。評価シートは、会の終了後に記入する時間をもったので、記述内容が、グループでの話し合いの話題に準ずる記述内容となる傾向が強かった。評価シートには、次のような記載が見られた。その一部を掲載する。

○小学校グループ ※小学校の先生方の態度やふるまいについての記載が多い

- ・小学校では、安全に対して気を遣っている（教師の使命感・責任感）
- ・子どもをよく見て、その気持ちを皆に返す（子ども理解）
- ・あいさつの強化、クラスの子とハイタッチ（学級経営）
- ・自律をうながすために、あえて小2に厳しく接する（教師の使命感・責任感）

○中学校グループ ※先生方の態度やふるまいも多いが、技能・方法にも触れている

- ・正しい知識を教えることよりもその生徒なりの考えを、活用・発表させる場面もあった（教師の使命感・責任感）
- ・生徒の主体性にまかせつつ、支障があれば、大胆に席替えなど改善する（学級経営）
- ・指名を意図的にすることで、授業を活性化させている（授業実践）

学生は、評価シートの項目を記入することを通して、自分の活動を評価したというよりも、活動して気づいたり、学んだりしたことを意味づけするという作業を行っているようだ。記述については、個人によって文章量や書き方に差がある結果となってしまった。文章で書く学生と、キーワードを書く学生がいたのだが、今後、個々の活動評価や自分の成長を振り返るときに、評価シートを活用するには、物足りないものとなってしまふ。次回の振り返り会に向けて、振り返りの会と評価シートの改善に取り組むこととした。

11月13日に、会の内容と評価シートの改善を行い2回目の会（図表7）を開いた。学生の参加は8名で、前回と同じく途中から2グループに分けた。教員も前回と同じ、本センターの担当者の専任教員と、教職支援室の実務家教員である。

図表7 第2回振り返り会 概要

日時	平成25年11月13日	13:00~14:10	場所	教職支援室（教育L棟1階）
内容	「9月~10月の活動の振り返り」			
1	自己紹介			
2	振り返り会について（担当者）			
3	<u>評価シートの記入</u> 10分			
4	各校の報告・振り返り *2グループに分かれて30分間程度			
5	各班の報告			
6	教員の話（実務家教員）			
7	総評（代表の学生）			

前回と同じく、全体の進行は、担当者が行った。会の進行で大きく変えた点は、評価シートの記入を、グループでの話し合いの前に行ったことである。また、会の最後には学生に総評をさせた。「2 振り返りの会について」では、担当者が、会の目的と評価シートの変更について説明をした。1回目の参加者のうち、今回参加できたのは4名であったが、新しい学生も加え、グループでの話し合いは活況を呈した。片方のグループには、小学校での活動が2名、中学校での活動が2名いたが次回の振り返り会にむけて、共通の視点をもつことになった。小学校では、「低学年の子どもに対するかかわりへの対応」、中学校では、「授業中の生徒の理解度の差異に応じた

支援」であった。自発的なよい試みだと感じた。総評では、4年生の学生が、「活動校の教頭先生より、ボランティアで、あまりプレッシャーを感じないでがんばってほしい」との言葉をもらい、前向きに取り組んでいることや、ボランティアに参加している多くの学生に、本振り返り会について知ってほしいという話をした。また、今回用いた評価シート（図表8）については、本ボランティアにかかわりのある複数の大学教員の意見も参考にしながら、改善したものである。振り返り会の中で記入、活用もしたいということで、それぞれの記述内容に、①「出来事や実践」と、それを受けて②「学んだこと・身に付けたこと」を記述するスペースを設けた。

○実際の記入の様子（1例）

小①国語の授業で先生の声のトーンがよく変わった

小②声のトーンの工夫だけで、子どもたちにとって魅力的な授業になる

中①子どもたちに、〇〇はだめというより、〇〇をしてみようと投げかける

中②肯定的な発言で、集団をつくっていく

また、縦軸・横軸の文言を、縦軸を学生が「関わる人たち」、横軸を「教員の仕事」という視点で取り上げた。縦軸の、関わる人たちの「特別な支援を必要とする子ども」という項目については、学生の支援形態でそのような子どもたちに関わることが多いということで、取り入れた。また、横軸の「生徒指導」「学級（経営）」を、項目としてわけるかどうかという議論にあがったが、生徒指導と学級づくりが表裏一体のものであるととらえ、今回は同じ項目に置いた。本振り返り会の中では、10分程度の記入する時間をもった。また、評価シート中には、③「これからすべきこと」を書くスペースを設けて、振り返り会以降の活動へのつながりをもてるよう意図した。なお、③「これからすべきこと」は、総評後に記入した。

図表8 11月・12月の評価シート

9月～10月 ①観察・実践したこと、②学んだこと・身につけたこと③これからすべきこと

静岡太郎 〇〇小 〇年〇組		教員の仕事		
		生徒指導・学級	授業	学校全体・行事 その他
関 わ る 人 た ち	子ども	①出来事や実践 ②学んだこと・身につけたこと		
	特別な支援を要する子ども			
	教職員			
	保護者 地域の人			
③これからすべきこと		【長いスパン】	【すぐに】	20

なお、3回目の振り返り会については、実務家教員を2人に参加をお願いした。2人には、グループ担当をお願いし、本センターの担当者は、全体の進行を担当した。

図表9 第3回振り返り会 概要

日時	平成25年12月18日	13:00~14:20	場所	教職支援室(教育L棟1階)
内容	「11月~12月の活動の振り返り」			
1	自己紹介			
2	振り返り会について(担当者)			
3	評価シートの確認 3分			
4	各校の報告・振り返り *2グループに分かれて50分間程度			
5	各班の報告			
6	教員の話 (実務家教員2名)			
7	総評(代表の学生)			

評価シートは11月と同じものを使用したが、今回は、事前に参加者に配布し、余裕をもって記入してもらおうことにした(図表10)。そのため、グループごとの話し合いは、50分近く確保できた。また、グループの振り返りの最初に、それぞれが書いてきた評価シートを見せ合う時間をとった。また、実務家教員には、前回まで同じように、基本は聞き役まわってもらったが、必要に応じて、助言や話題の転換も行った。

図表10 学生が記入してきたシート

11月~12月 ①観察・実践したこと、②学んだこと・身につけたこと③これからすべきこと

年 組	教員の仕事		
	生徒指導・学級	授業	学校全体・行事 その他
子ども	「はげし」を覚悟して 自分の強さをアピール 「友だち」を 「はなす」	ハートの動きと表情の観察 「おもしろい、種類別」 「おもしろい」 「おもしろい」	他学年の交流を通して お礼の気持ちを伝える。
特別な支援 を要する 子ども	(注釈的)笑顔で自分の成長を 長に喜んでくれた。	自分より自分の表情が 優れる	新しい種類の仕方を 先生や生徒たち
教職員	ほめ上手な先生	給食の時間のお話の量に ついて(他者協同)	子どもにやさしい指導を 話してくれた。
保護者 地域の人			先生に協力的な保護者 生徒一人一人の成長の観察の 大切さ(話の面白さ)
③これから すべきこと	【長いスパン】 支援者や保護者を巻き込んで 活動する。	【すぐに】	ボランティア活動

11月~12月 ①観察・実践したこと、②学んだこと・身につけたこと③これからすべきこと

年 組	教員の仕事		
	生徒指導・学級	授業	学校全体・行事 その他
子ども	「はげし」を覚悟して 自分の強さをアピール 「友だち」を 「はなす」		他学年の交流を通して お礼の気持ちを伝える。
特別な支援 を要する 子ども	(注釈的)笑顔で自分の成長を 長に喜んでくれた。		新しい種類の仕方を 先生や生徒たち
教職員	ほめ上手な先生	給食の時間のお話の量に ついて(他者協同)	子どもにやさしい指導を 話してくれた。
保護者 地域の人			先生に協力的な保護者 生徒一人一人の成長の観察の 大切さ(話の面白さ)
③これから すべきこと	【長いスパン】 支援者や保護者を巻き込んで 活動する。	【すぐに】	ボランティア活動

ここでは、振り返り会と評価シートの実際と改善を紹介してきたが、第3回目の振り返り会で、同じグループになった3人の学生のエピソードについて触れる。この3人は、学校支援ボランティア活動に継続的に参加していることもあり、ボランティアに対するこだわりや、教員や学校に対する思い入れも強くなっていった学生である。これら学生たちの言動において、この3人の学生には、本活動に対するそれぞれの「参加への思い」があることがわかってきた。

- Aさん…自分の考え等を抑えても、その学校・学級に貢献しようとする思いで参加
- Bさん…自分が吸収できることを、できるだけ吸収していこうという思いで参加
- Cさん…自分の考えを持ちながらも、学校・教員の協力者になろうという思いでの参加

Aさんは、小・中学校の2校で、2年間ボランティアに参加してきた学生である。振り返り会におけるAさんの印象的な言葉として、「先生と一緒に学級をつくっているという感じがある」「ボランティアで自分を出せないのはつらい。でも、週1回の参加の自分には、時には妥協も必要。それは、子どもたちにとってもよい。」「時には、先生から、基準を教えてもらう。せっかく学級に入るのだから、その学級をいい学級にしたい。」である。Aさんの本活動に参加するスタンスがにじみ出ている。Bさんは、次年度より採用が決まっていることもあるのか、入職後を意識して、「特別支援の知識はあまりないが、子どもと接していくと、子どもが心を開いていった。その対応からヒントがもらえる。」「子どもへの叱り方に悩む。担任の先生が怒っても、それを受け入れる子どもたち。子どもたちは先生を信頼している。それが何か見つけているところだ。」など、現場の先生・子どもから貪欲に学ぶ意識が高いことが伺われる。Cさんは、学校現場で、常に自分の思いや提案をもちつつも、平行して支援者として学校や先生方に協力することを考えている。「そう(学校や先生方に協力する)というスタンスだから、学校支援ボランティアとして、いろいろな学級に行くことができる。」「活動日に、急に算数が苦手な子どもたち5人の支援をすることになった。でも、そのことが、(自分の)その日の一番の仕事かなと思った。それから何が学べることも楽しみである。」などを語っている。本活動に参加している学生たちは、教師と学生のはざまで、立ち位置を悩む学生もいる。また、自分が期待していた活動ができず、モチベーションを下げる学生もいることも事実だ。Aさん、Bさん、Cさんたち3人は、今回の振り返り会でこれらの話をしながら、お互いの参加への思いを知り、その違いに、軽い衝撃を受けたようであった。しかし話をする中で、お互いの思いを認めていった。学校支援ボランティアでは、学生自身の活動や指導、支援に関する裁量に制限があることは当然である。この3人には、様々な状況の中でも、自ら活動や学びを切り開いていく、たくましさやしなやかさが身に付いていったのである。大学教員にとっては、振り返り会をやってよかったと感じた瞬間でもあった。

6. まとめ

6.1 システム構築

「主体性」「ニーズ」「システム構築」「質保証」をキーワードにし、学生の学びを支えるシステムを構想し、試行や実践を取り組んできた。従来あるシステム(Web登録システム、事前指導、冊子等)に加えて、新たに意識調査や、振り返り会・評価シートの開発を行ってきた。また、取り組みの様子を教育委員会や学校現場の教員にも知ってもらい、本活動の方向性を伝えたり、意見をもらったりすることができた。総じて、その中で、大学教員側に得るものが多くあったことである。今までは、どちらかと言えば、大学教員は活動の入り口や、ある一点で学生たちとかわかってきた。一方、今回の取り組みの中では、大学教員は、多くの学生の思いや声を知ることとなった。また、そこには、システムを構築していく上でのヒントやアイデアがあった。それを生かすために、研究者・実務家の教員、そして本センター専任・学部教員等、様々な大学教員が集うことになった。期間を置いて、3回の振り返り会の試行されたことが大きく、実際の学生の思いや様子を見て、そして現場での学生の活動を踏まえながら、会や評価シートを改善していくことができた。詳しくは前項に触れたとおりである。活動の入り口をしっかりと行い、その後、2か月に1回程度の振り返り会は、ねらいとした学生の「言語化」「客観化」にも丁度よい期間であったように思える。さらに、本取り組みに、3・4年生の学生が参加したことも、話し合いを

活性化させただけでなく、来年度の取り組みが、本年度参加した3年生によって、全くリセットして始まるのではなく、緩やかな縦の学年のラインもつくりながら、本取り組みを創り上げていく可能性を教えてくれたのである。貴重な学びのサイクルである。システムをつくるのは教員かもしれないが、それを推進していくのは、実は本活動においては学生たちであろう。

6.2 学生の学び

本取り組みによる学生の学びの一面について、本年度の取り組みに参加した学生の評価シートの記事から考察してみる。学生の評価シート（同じシートをつかった2回目・3回目）の記入内容から、学生の2つの変化が確認された。

第1の変化としては、シート横軸「生徒指導・学級」・「授業」の記入量は、2回目、3回目ともそれほど変わらないが、シート横軸「学校全体・行事」の項目で、3回目の記述項目の量が増えていることである。これについては、学生がシートを用いることによって、ねらいの1つであった視点の広がりが見られたのではないだろうか。広く学校全体の動きや教員の仕事に目が向いていくきっかけを得たと考えられる。

また、第2の変化として、「これからすべきこと」の記述において、2回目より3回目の方が、学生の目標が、より具体的になったことである。例えば、Dさんは2回目の長いスパンでべきことの記入で、「特別な支援を要する子への対応を観察し実践する」と書いていたが、3回目では「気になる子のよい面を見つける」となった。また、すぐにすべきこと、2回目では「上手な授業のやり方やひきつけ方を学ぶ」が、3回目では、「疑問に思ったことは先生に相談・報告する」となった。Eさんは、長いスパンで2回目には「子どもの不思議を知る」が、3回目では「子どもの考えを尊重した関わり方を学ぶ」となった。また、すぐにすべきこととして、2回目では「もっと（児童）に正面から向き合いたい」が、3回目では、「はっきりとした口調での注意、仲裁への入り方」となっていた。自分の活動校にそった具体的な目標をもっている。

評価シートを活用した振り返り会は、現在の活動中の活動を立ち止まって確認することに終わるのでなく、より学校を広く、具体的に見ていく態度や視野を育んでいる可能性があるのである。学生の学びの一端が見られる。振り返り会での自分の活動の「言語化」、シートを使っての「客観化」、そして仲間や実務家教員等からの助言によって、自らの課題意識や学校全般に対する学びの姿勢を高めていくのであろう。

※なお、評価シートに係る資料は、本報告書の「第3部資料編」に掲載した。

(山本真人)

第3節 「教員初期スタンダード」の策定

1. 「教員初期スタンダード」という発想

静岡市では初任校におよそ3年間勤務することから、初任校を無事に勤めあげて教師として成長できるところまで大学教育の守備範囲を広げるとすれば、まずは、入職後3年間という初期教職生活で必要とされる実践的な指導力を明らかにする必要がある。

ここでいう実践的な指導力とは、早い段階で教職からドロップアウトしないような「最小限の資質能力」とともに、学校現場で自らの持ち味を発揮して活躍が期待できる「力量のある教員の資質能力」などが想定される。また、こうした資質能力は、入職後にのみ身につくというわけではなく、大学での理論と学校現場での実践を往還させることでも育成することができる。例えば、学校におけるコミュニケーション能力や同僚性などは、大学で学んだ内容を「学校支援ボランティア」で実際に体験することで、養成段階でもある程度身につけることが可能である。

本事業では、以上のような特徴を備えた初期教職生活で必要とされる実践的な指導力を、大学と教育委員会が協働して検討し、「教員初期スタンダード」として策定することを企画した。

2. 策定までのプロセス

本事業では当初、「教員初期スタンダード」を先行して策定し、それをルーブリック化するなどして、客観的な評価システムの構築を構想した。しかしながら、ボランティア学生の活動実態を観察し、事業実施担当者間で議論を重ねる中で、客観的な評価指標の策定は必要であるものの、他方で、学生自身の経験や主観から、学んだことを「言語化」することも重要であるとの認識を共有した。そこで本事業において、まずは、学生がボランティアでの経験を言語化し、自己評価するためのシート（以下、評価シート）を作成し、その枠組みを用いて、入職3年目までの教員が学校現場で求められる実践的な指導力をパフォーマンスレベルで表現した「教員初期スタンダード」を策定するという手順をとることとした（評価シートの作成および、それをういた振り返り会については、前節を参照）。

評価シートの枠組みは、学校支援ボランティアとして教員の仕事の一部を経験する中で、その仕事に関わる様々な人と接するという観点から、仕事内容×接する人という領域を設定した。具体的には、横軸に教員の仕事として「生徒指導・学級」「授業」「学校全体・行事その他」の3項目を配置し、縦軸に関わる人たちとして「子ども」「特別な支援を要する子ども」「教職員」「保護者・地域の人」の4項目を配置して、3×4の合計12領域の中に、学生がボランティア活動で「観察・実践したこと」と「学んだこと・身につけたこと」を自由記述させるという形式とした。

この評価シートの枠組みである12領域をもとに、まずは、本事業実施担当者である静岡大学教育学部教職支援室の4名の特任教授を中心に、入職後3年間という初期教職生活で必要とされる実践的な指導力をパフォーマンスレベルで抽出した。次に、教員を目指す学生、現職の若手教員や管理職などに、この原案を検討してもらい、適宜修正を加えた。以上のプロセスを経て策

定されたのが、図1の「教員初期スタンダード」(第一弾)である。

3. スタンダード策定の課題と今後の予定

「教員初期スタンダード」(第一弾)は、学校現場での経験豊富な教職支援室の特任教授らによって原案が策定されたとはいえ、その妥当性についてはまだ十分に吟味できていない。今後は、教員を目指す学生、現職教員や教育委員会関係者などを対象としたインタビュー調査や質問紙調査を実施し、このスタンダードについての妥当性を検討することで、より実効性ある指標へとブラッシュアップすることが求められる。

また、本事業は当初、この指標を用いてボランティア学生の資質能力を把握し、客観的な評価システムの構築を目指していたが、残念ながら事業年度中に達成することはできなかった。今後は、スタンダードの各指標における評価尺度を検討し、実際にボランティア学生の資質能力を把握するためのシステムとして利用する予定である。

(長谷川哲也)

図1 「教員初期スタンダード」(第一弾)

教 員 の 仕 事				
	生徒指導・学級	授 業	学校全体・行事 その他	
関 わ る 人 た ち	子ども	<ul style="list-style-type: none"> • 落ち着いた秩序のある学級を作ることができる。 • 子どもの声を聴き、子どもの様子を観察することで、子ども一人一人の様子を丁寧に読み取ることができる。 • 子どもの安全を第一に考えた指導ができる。 • 学習に集中するための環境整備ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 学習指導要領で求める教科・領域の目的や内容を把握し、計画的に授業を進めることができる。 • 子どもが授業に集中し、秩序ある学習環境を整えることができる。 • 教科等の基礎基本を重視し、身につけさせたい力を明確にした授業を展開することができる。 • 子どもの主体性を生かし、ともに学び合う学習を展開することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 学校の教育計画を理解したうえで、自分の学級だけでなく、学年、学校を意識した指導ができる。 • 他学年や学校全体の子どもに関心を持つことができる。 • 教育上の問題（体罰やいじめなど）に対して、常に目を配り、適切に対応できる。 • 子どもの発達段階に応じた子ども同士の交流や自治的活動を展開することができる。
	特別な支援を要する子ども	<ul style="list-style-type: none"> • 一人一人の生活全般に関する状況を把握し、それに適した指導を実践することができる。 • 支援を要する子どもを通じて、よりよいかかわりを深める学級経営ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 支援を要する子どもの学習意欲を高め、学習する楽しさを味わせることができる。 • 教材、教具、板書等の工夫をして、どの子にもわかりやすい授業を心掛けている。 	<ul style="list-style-type: none"> • 教職員間で情報を共有し、支援を要する子どもへの共通理解をもつことができる。 • 多様性を尊重し、人権意識を育む教育をおこなうことができる。 • 学校組織、保護者、外部機関と連携して教育をおこなうことができる。
	教職員	<ul style="list-style-type: none"> • 組織の一員であることを自覚し、教員間で協働して課題解決に取り組むことができる。 • 生徒指導や学級経営上の問題を共有することができる。 • 他の教員の教育実践のよさを知り、自分の教育実践に生かすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 他の教員の授業実践から学び、自分の授業力（教材研究や指導技術）を高めることができる。 • 積極的に校内研修に参加し、チームとして授業力を高めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 校長の学校運営の方針を理解し、それを実現するために、自らの役割を遂行することができる。 • 学校における自分の分掌の位置づけを意識し、それを実行することができる。 • 他の教員の役割や分掌を把握し、それに協力することができる。
	保護者・地域の人	<ul style="list-style-type: none"> • 家庭訪問や学級通信を通じて保護者との信頼関係を深めることができる。 • 保護者の教育相談に親身になって相談できる。 • 地域との交流や PTA との積極的なかかわりができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 地域の教育力を自分の授業実践に取り入れることができる。 • 自分の授業実践について、保護者に発信し、説明できる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 社会人として常識的に振る舞い、保護者や地域から信頼を得ることができる。 • 保護者や地域の人々に学校が支えられているという意識をもつことができる。 • 地域の行事等に積極的に参加することができる。

第4章

シンポジウム「大学と現場をつなぐ学校支援ボランティアのカタチ」

第1節 実施報告

1. シンポジウムの概要

本事業では、「学校支援ボランティア」に関して、受け入れ先の教員や参加する大学生に対して現在の状況や課題、先進的な事例を紹介することで、学校支援ボランティアの高度化を図ることを目的として、シンポジウムを実施した。

以下に概要を示すとともに、それぞれの内容について報告する。

実施日時	2014年2月4日（火）14：00～16：30
実施場所	ホテルアソシア静岡 カトレア（静岡県静岡市葵区黒金町56番地4階）
参加者	学校支援ボランティア関係者 46名 参加者内訳：静岡大学教員 13名 静岡市教育委員会 4名 学校支援ボランティア受け入れ小学校教員 12名 学校支援ボランティア受け入れ中学校教員 2名 学校支援ボランティア参加学生 15名
内容	<ol style="list-style-type: none">開会の挨拶 静岡大学教育学部学部長 梅澤 収 静岡市教育委員会教育長 高木 雅宏事例紹介① 「静岡大学教育学部学生によるボランティアの活動報告」 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 山本 真人事例紹介② 「先進的な他大学の取り組みについての調査報告」 静岡大学大学教育センター 望月 耕太ラウンドテーブル テーマ「ボランティアを担う大学生の資質能力向上を目指して」ボランティア支援システムの紹介 静岡大学教育学部 塩田 真吾閉会の挨拶 静岡大学教育実践総合センター長 村山功

2. 開会の挨拶 静岡大学教育学部長 梅澤 収

本日は本シンポジウムにご参加いただきありがとうございます。とりわけ高木雅宏静岡市教育長様をはじめ、静岡市教育委員会、そして学校関係者のみなさまには、公務ご多用の中、多数のみなさまにおいでいただきまして、本当に感謝しております。

「学校支援ボランティア」は、今から10年ほど前まではほとんど行なわれていなかったのですが、今ではたくさんの大学生が公立学校の現場に入っています。静岡大学は静岡市内にあるということもありまして、静岡市内の公立学校の皆様には本当にお世話になっております。

私たち教育学部は、学校教育教員養成課程の中に、教育実践学という専修を1998年4月に立ち上げました。その専修では「実践的な体験をどう実施するか」ということ附属教育実践総合センターと静岡市教育委員会とで協議して、2001年から静岡市立富士見小学校に、学校体験の場として学生が入らせていただくこととなりました。その活動は、教育実践学の学生が「訪問活動」として行う学校支援ボランティア活動（1～4年次まで）として、現在も続けております。2001年といいますと、完全学校週5日制実施の前年で、土曜日授業が月2回であったかと記憶しておりますが、学生がその日に学校に遊びに行くことのできるという活動でした。それだけでも当時は、学校現場から少なからぬ戸惑いというか、学生が学校へ入ることへの教職員の方々の拒否反応があったと思います。2002年4月からはご存じのように学校週5日制の完全実施となりましたので、大学で授業の少ない平日を学生が選んで、今度は学校側から先生方が学生にやってもらいたいことを要望として出してもらい、学生たちの側も「こういうことを自分ができるんだ（得意分野）」あるいは「やりたいんだ」という要望を出すことで、学校側と学生側の“マッチング”というのをやっていきました。このようにお互いが要望を出し合うことで、お互いが活動する価値を見いだすことができ、おかげさまで今年度13回目となりましたが、毎年度活動報告書を出しながら、教員養成のカリキュラムにも位置づけてきました。

この教育実践学専修における「訪問活動」は、学校支援ボランティアでありながらも大学が単位化して、しかも大学在学中に恒常的に学校現場と関わっていくというシステムができたという例でございます。このほかにも2009年度からは、附属教育実践総合センターが窓口となっている「学校支援ボランティア」という活動で、所定の条件を満たせば単位を認定することを始めました。この活動で実際に単位を取る人は決して多くはないですが、学校現場へボランティアに行ったという学生は年間延べ250名ぐらいにのぼります。

このように静岡大学もそうですが、学校支援ボランティアが公立学校などもかなり普及し、一般化している現在の状況で、あらためて「大学と現場をつなぐ学校支援ボランティアのカタチ（形）」というものを考えてみたいということになりました。文部科学省の「教員の資質能力向上に係る先導的取組支援事業」の公募がありましたので、このコンセプトで活動事業を申請して今年度採択されることとなり、今回のシンポジウムでその成果報告をさせていただくこととなりました。



今日の教員養成カリキュラムでは、「実践的指導力」というものが大変重視されております。もちろんこれはそもそも論として、大学がそこまでできるのか、「実践的指導力」の育成は学校現場にお任せした方がいいのではないか、という議論があります。ところが、「実践的指導力」の育成を完全に学校現場にお任せしてしまうと、大学の教員自身が、例えば「学校現場から課題を吸収して自分なりに学生に伝える」とか、「自分なりに研究に活かす」というスタンスがなくなってしまいます。こうした姿勢は大学医学部の附属病院と比較するとわかりやすいです。附属病院というのは医療における臨床の場であり、大学医学部の教員は患者さんを診療しているし、そこで医学生にも、診断・処方・施術などの技術を教えなければなりません。ところが、教育学部の場合は、大学教員が学校現場に対して関心がかなり薄かった、またそうなってしまってもほとんど問題意識を感じない傾向があり、これまでは「大学と学校現場を意識的に繋ぐ」という発想が弱かったように思います。もちろんこの医学部と教育学部の比較は少し飛躍の面もありますが。

こうした意味から、「臨床の知」として学校現場を体験する、この学校支援ボランティアは、「実践的指導力」を育むための教員養成をデザインしていく際に、きわめ重要な役割を果たしていると思います。ただし今現在の課題とされるのは、「学校支援ボランティアを行うことで、いったいどのような力が学生に身につくのか」、ということです。これは、初任者も含めて、大学が養成から採用、研修までといった教師教育全体をうまくサポートしていくためのシステム、継続的に支援していくためのシステムを構築したいと考えている立場から、解明していく必要があります。その意味で、大学での学びと学校現場での学びのちょうど中間に位置する「学校支援ボランティア」に注目しているところでございます。

本日は、以上お話ししましたコンセプトにもとづいて、今年度の文部科学省事業の成果の一部を発表いたしますので、ご高評のほどよろしく申し上げます。

簡単ですが、開会の挨拶とさせていただきます。

静岡市「学生ボランティア事業」については、平成 18 年度から静岡市と静岡大学が組織的に連携して進めているところです。これまで 7 年間という長期にわたって、大学と学校現場とが一体感をもっているということは、本当に素晴らしいことだと思っております。

私の大学時代、学校現場を知ることができる活動といえば、かつては教育実習だけでした。しかも大学 4 年の 4 月から 5 月にかけてのたった数週間です。そして教育実習が終わるとすぐに教員採用試験があります。短期間で慌ただしく活動し、振り返る余裕もなかった教育実習の中で、「いったいどのくらい学校現場を理解できたのか」というのが正直な印象です。

こうした教育実習と比べると、学生ボランティアは「自分から学ぼう」という自発性が重要であり、大学から「行きなさい」と言われるものではありません。しかも自分の出身校であれば行きやすいでしょうが、必ずしも自分が知っている学校ばかりではありません。自分でボランティアに行きたい学校を探し、そこへ足を運んで、「私は何がしたい」とか「私はこんなことができる」と交渉しながらスタートする、最初はこのような活動だったのでしょうか。それが現在では、さらに効率が良く効果が高いシステムへと発展しており、その一つがマッチングです。教育委員会が間に入ることで、学生と学校とのニーズやリクエストをマッチングさせ、これまで個別に対応していたボランティアが、組織的なシステムへと移行したわけです。

今後の課題は、マッチングして学校を訪問する学生にとって、さらに意味あるボランティア活動にするにはどのような工夫をすればよいかということを考えることです。そのためには、学校の先生方や静岡大学の先生方からのアドバイスをいただきながら、ボランティアという言葉をかえた教員養成のカリキュラムにしていくことが重要であろうと考えております。

私はボランティアという言葉は大変素晴らしいものだと感じておりますが、単に学校現場が一方的に利益を得るだけではもったいないとも考えています。せつかく教員を目指す学生が学校現場を経験する機会なのですから、ぜひ校長先生、教頭先生、担当の先生方には、学生の成長についてもお願いしたいのです。ボランティアとして学校を訪問する学生が、「ああ、この学校でボランティアができてよかった！」と実感したり、「教育ってすごいなあ、よし、私は必ず学校の先生になるぞ！」という想いを強くしたりできる活動になってもらいたいと考えております。今回の研究成果が、これから教員を目指す学生のさらなる身となり力となり、将来につながるようなものになることを期待しております。

貴重な大学 4 年間のすべてをボランティアに費やすことはできないからこそ、大学での学習のために、あるいは自分ために、限られた時間をどう有意義に使うのかということが大切になるでしょう。そして、教職への準備として、ボランティアをどう位置づけるかということも、自分にとって大きな課題になるでしょう。ぜひ、自分の時間を上手に使いながら、教員を目指す上で意味ある 4 年間を送ってもらいたいと願っております。



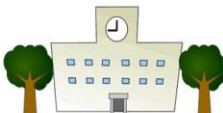
3. 事例紹介① 「静岡大学教育学部学生によるボランティアの活動報告」

静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 山本 真人

静岡大学教育学部学生によるボランティアの活動報告として、静岡大学と静岡市教育委員会による学校支援ボランティアの事例及び成果を発表した。以下には発表スライドの一部を示し、詳細は本報告書の「第3部資料編」に掲載した。

文部科学省「教員の資質能力向上に係る先導的取組支援事業」シンポジウム
～大学と現場をつなぐ学校支援ボランティアのカたち～

**学生の学びを支える
「学校支援ボランティア」を目指して**



静岡大学 静岡市教育委員会

1 学校支援ボランティアのキーワード

【主体性】 【ニーズ】
【システム構築】 【質保証】

2 求められてきた社会的状況

1990年代 **地域の住民・保護者たち**による学校支援ボランティア
1997年～「**フレンドシップ事業**」等による学生の「学校現場」への参画
2002年～学校の**完全週五日制**等によるボランティアの機運の高まり
2003年 全国100地区、73の大学で「**放課後学習チューター事業**」
2005年 中教審答申「**新しい時代の義務教育を創造する**」
2006年 中教審答申「**今後の教員養成・免許制度の在り方について**」


5 静岡大学の「学校支援ボランティア」(概要)

- 平成15・16・17年前後に、実践センターが窓口
*静岡市 16年(63名)→17年(96名)→18年(161名)
- 24年度実績は、派遣機関数が54機関(幼、小、中、高、特支他)、参加学生数がのべ243名であった。
- 平成21年度から単位認定の制度を設ける。
- 近年、ボランティア登録システムの導入、「手引き」の改訂、学生の間接報告等の改善を行う。

〈強み〉

- 本活動に、主体的に参加する多くの学生
- 大学と、活動校・教委との良好な関係の継続

7 静岡版「教員養成全般」や「入職後」も意識した「学校支援ボランティア」の検討



静岡市教育委員会

5年目以降
力ある教員へ

初任校
1年目～5年目
教員初期キャリア

大学での学びと初任校での学びをつなぐ
学生ボランティア活動

静岡大学

① 教員初期スタンダードの検討
大学と初任校が連携して、初任の教員生活で必要とされる実践的知識力を醸成する。
その過程をともに、教員初期キャリアでのドロップアウトを防ぎ、教員の基礎を強く実践的な指導力の醸成(教員初期スタンダード)を育成する。

② 学生ボランティアの指導・評価システムの構築
①の教員初期スタンダードを軸とし、学生ボランティア活動を経験した教員への評価を実施し、学生ボランティアの継続を促す。
-教員初期スタンダード及び調査により明らかになった課題をもとに、学生ボランティア活動の事後指導の充実、評価システムの構築を行う。

「教員の資質向上に係る先導的取組事業(文部科学省)」 静岡大学・静岡市教育委員会

「学校支援ボランティア 振り返り会 試行①」

第1回振り返り会
日時 平成25年7月31日
13:10～14:10
教職支援室(教育L棟1階)



「5～7月の振り返り」

- 自己紹介
- 振り返り会について(山本)
- 各校の報告・振り返り
*グループで30分間程度
- 代表の学生の感想
- 終わりの話(実務家教員)




評価シートの記入後に、解散

8 今後に向けて

～ 大学と現場をつなぐ学校支援ボランティアのカたち ～

- 学生と学校現場
 - ・学校現場における指導・評価を生かした活動
- 大学・センター
 - ・教職支援室と連携した振り返りシステムの充実
 - ・様々なニーズに対応した学生への支援
- 教育委員会
 - ・効率的な派遣システムの実現
 - ・教員養成大学等との連携強化
- その他(研究・調査の継続)



ご清聴ありがとうございました

事例紹介② 「先進的な他大学の取り組みについての調査報告」

静岡大学大学教育センター 望月 耕太


「先進的な他大学の取り組みについての調査報告」として、島根大学、大分大学、佛教大学へのヒアリング調査の成果を発表した。以下には発表スライドの一部を示し、詳細は本報告書の「第3部資料編」に掲載した。

平成26年2月4日(火)

文部科学省「教員の資質能力向上に係る先導的取組支援事業」シンポジウム
～大学と現場をつなぐ学校支援ボランティアのカタチ～

先進的な「学校支援ボランティア」に関する調査
—佛教大学の教育職インターンシップを中心に—

望月 耕太(静岡大学)


 2. 調査対象大学の概要①

(1) 島根大学 「1000時間体験学修」

- ① 学校教育体験領域(340時間)
教育実習等
- ② 臨床・カウンセリング体験領域(150時間)
カウンセリング実習や特別支援教育体験
- ③ 基礎体験領域(510時間)
学校や社会教育施設における学習支援

必修 400時間

活動時間数の多さ


 2. 調査対象大学の概要②

(2) 大分大学 「まなびんぐサポート」

活動参加①
↓
ホームページから活動記録の記入
↓
大学教員がコメント記入
↓
活動参加②
↓
⋮

ふり返り
ふり返り
新たな視点の獲得
ふり返り

Webの活用による省察


 2. 調査対象大学の概要③

(3) 佛教大学 「教育職インターンシップ」

大学と包括協定
京都府教育委員会、京都市教育委員会

↓ 大学と教育委員会の連携

学校の下承が得られれば活動開始

 3. 佛教大学の事例①

大学教員が各学校に継続的に訪問


① 活動開始前 学校の様子や大学に対する要望を確認
各学校と学生のマッチング

↓

② 活動期間中 活動先におけるトラブルの対応
学校と学生の意見を聞き取る

↓

③ 活動終了後 学校に学生の活動状況を聞き取る

 4. さいごに

現状の課題①:
学生も学校もお互いに要望が言いにくい
⇒ 学生と各学校のニーズを調整する大学の役割
大学側のスタッフの確保、各学校にボランティア担当の教員配置

現状の課題②:
学校支援ボランティアが他の教育活動と結びついていない
⇒ 現場の知と大学の知が結びついたふり返りの場
既存の教員養成カリキュラムの見直し、大学と教育委員会の共催の授業の実施

4. ラウンドテーブル「ボランティアを担う大学生の資質能力向上を目指して」

ラウンドテーブルでは、「ボランティアを担う大学生の資質能力向上を目指して」というテーマのもと、受け入れ先の教員と学生、大学教員がグループとなり、話し合いを行った。

話し合いでは、大学教員がファシリテーターとなり、以下の6つのトークテーマからいくつかのテーマを選ぶ形で進めた。

トークテーマ①「学生の学びの質を向上させるためには」
トークテーマ②「学生と教員の連携不足を改善するためには」
トークテーマ③「学校支援ボランティアの（教室での）立場はどうあるべきか」
トークテーマ④「学校に行ってココが困った／学生が来てココが困った」
トークテーマ⑤「学校に行ってココが良かった／学生が来てココが良かった」
トークテーマ⑥「ボランティアでこんな教員になってほしい」

以下にグループAからGまでの記録を示す。（名前の前の◎がファシリテーター）

グループA			
メンバー	池谷聡美（葵小）	増田達一（大谷小）	伊藤亜佑子（教育学部4年）
	橋尾周平（教育学部4年）	◎杉山孝（教職支援室）	
<p>トークテーマ：④学校に行ってココが困った／学生が来てココが困った ⑤学校に行ってココが良かった／学生が来てココが良かった</p> <p>はじめに、2つのテーマについて各自が思ったことを列挙し、付箋に書く時間を数分設けた。付箋は手元に置いておき、後ほど発表をする際に提示するようにした。</p> <p>次に、大学生が2つのテーマ両方について書き出した意見を述べた。発表順は伊藤亜佑子、橋尾周平の順。</p> <p>学校に行って困ったこととしては、「クラスの中にいる特別な支援を要する子への対応」、「学級内でのルール把握」、「どのような立場でクラスに入るべきか」、「子ども1人1人にあった指導の仕方」、「クラスによって先生の指導が全く違った」、「具体的な指示をもらえず、どう動いていいかわからなかった」、「子どもの細かい情報を教えてもらえないため、適切な指導ができなかった」等の意見があげられた。</p> <p>また、学校に行ってよかったこととしては、「学級経営のしかたを学ぶことができた」、「子どもに対しての叱り方、ほめ方がわかった」、「授業中の先生の声のトーン等、先生の授業中の工夫を知れた」、「職員室の中の雰囲気や先生方同士の連携を感じ取ることができた」、「長期的に</p>			

参加することで子どもの成長を直に見ることができた」、「子どもへの接し方、叱り方を学び、冷静に対処することができるようになった」、「運動会等の運営にも関わることができて良かった」、「掲示物の作成をし、それらに関しても学ぶことができた」等の意見があげられた。

ここで、学生が提示した付箋を生徒理解や授業などの観点で整理する活動を1～2分行った。また、その中で、教員側から学生に対してボランティアの活動状況に対しての質問が行われた。

付箋の整理が終わった後、学生の話の踏まえて教員から同じテーマで意見が出された。学生を受け入れて困ったこととしては、「インターンシップなど評価に関わる人を受け入れると指導しやすいが、ボランティアは指導しにくい」、「挨拶や笑顔など、言いたいことがあっても最初の方は言いにくい」、「週1回と少ないため、次の活動にどう繋げるかが難しい」、「言われたことはやっても自分で考えて行動できない学生もいる」、「担任側でもどこまでボランティアにお願いしていいか悩んだ。」、「子どもと遊ぶ際、学生も一緒になって時間などのけじめがつかなくなる時がある」、「何をして欲しいか伝えていないと、後ろで見ていただけになってしまう場面がある」、「お礼が学校からできず、心苦しい」等の意見があげられた。

また、学生を受け入れてよかったこととしては、「勉強ができなかった子どもが支援のおかげでできるようになり、笑顔が戻ってきた」「毎週来てくれるのを心待ちにしている子どもの姿を見ることができた」、「人の目が入ることで、受け入れ学級の教師の意識も高まった」、「何度も来てもらううちに、人間関係ができてきた」、「手をかかる子への支援をしてもらえて助かる」、「事務的な部分を頼むことで、担任が子どもに付くことができる」、「担任以外の大人がいるので、子どもたちが話しやすく、楽しく学校生活を送れる」、「教員側も感情的に叱ることを抑えられるようになった。(力関係のセーブ役)」、「クラスに固定して入ってもらうことで、人間関係をつくりやすい」等の意見があげられた。

ここからは、双方の話を聞いて考えたことなどを自由に語り合う時間となった。学生からは「どちらにしても立場があやふやなのだと感じ、難しいと思った」、「学生ボランティアにどこまで指導していいか先生も悩んでいることを知った」等、学生ボランティアとしての曖昧な立場に対して悩んでいるのは、自分たちだけではなくお互いである、という発見があった。また、困ったことや疑問を、学生も進んで聞きに行くべきとの提案もされた。

また、教員側からは学生ボランティアの捉え方に対して「将来の先生を育てている」という感覚があるとの意見が出た。それと同時に、学生が活動目的をもっとはっきり出してもらえれば、学校側もいろいろできる、と学生に対する要望も出された。ただ、大学院生がボランティアに入る際は明確な目的を持っていても学部生がそれを持っていないのが現状との声が上がった。その理由として、まだ学部の学生は教員としての経験がなく、様々な教を「受ける」立場にあることが多いことがある。それ故に、自分の立場について悩むことがあるのではないかという意見があげられた。そして、学生ボランティアに行く学部生に対して、大学側も事前指導等の支援はやっているが、この点は課題として残ることが大学教員によって確認された。

更に、「学生にどこまでお願いしていいかわからない」という悩みに対して、教員から詳しい事情の説明があった。ひとえに学生ボランティアといっても、ボランティアで単位が出る人、完全なるボランティアで来ている人等、現在の学校には様々な立場の学生が入っている。そのため、それぞれの学生に対してどこまで要求していいのか、一概には言えず戸惑うことがある。

また、学生には現場についての力はまだないので、活動に関して担任に具体的に指示をしてもらうようお願いすることがあるが、その指示も同様にどこまでしていいのか悩むのだという。

これらの議論を基に、付箋を子どもへの支援、立ち位置、実践力などで改めて分類し、再度整理する作業を1~2分行った。

まとめとして、学生ボランティアが入ることで学校側にメリットがあり、同時に学生にもメリットが生じる状態であることが望ましいとの意見が大学教員から提示された。学生ボランティアが学生の学びに資するものであることはいい教師を育てることになり、将来的にその学校にいい教師を集めることに繋がる。そのような形を作るために、どんなことをこれから考えていかなければいけないかが今後に繋がる課題となった。

最後に、このことに関して「学生は学ぶためにボランティアに来ている」という学生のボランティア参加に対する認識の確認が行われ、議論は終了した。



グループ B

メンバー	清水英明 (大里東小)	皆川和史 (中島小)	◎菅野文彦 (教育学部)
	鳥山裕香 (教育学部 4 年)	加藤宰 (教育学部 3 年)	山口聖菜 (教育学部 4 年)

トークテーマ：①学生の学びの質を向上させるには (メインテーマ)

テーマは絞らず、5つのテーマについて話し合うことにした。5分程度書く時間を設け、その後付箋をテーマごとにはり、テーマごと1人ずつ順に付箋について説明するようにした。それぞれ、大学教諭、学生、受け入れる学校、実践学を卒業した教員という立場から意見を述べた。菅野、皆川、加藤、山口、鳥山、清水の順で行った。

B班は議論しまとめると言うよりは、各自が意見を述べていた。

はじめに、「学生の学びの質を向上させるには」について述べていった。意見としては、体験を言語化し、それを共有することが必要であるや学生は時間があるので、子どもの話をじっくり聞くことができる、なんでも嫌がらずやる (テストの丸つけなど、実際の現場ではそのような活動の方が多くなってくるので少しでも慣れておくと良い) などあった。また、皆川はやったことが実際の教員になった時も生きていと述べていた。学生からの意見として、振り返りの会の充実、学生だけの意見ではなく大学の先生の意見も聞くことが大事ではないかと述べていた。また、その日のうちにわからなかったことは担任に聞くようにし、先生とコミュニケーションをとることが必要である。受け入れの学校側の意見として、疑問点など積極的にきくようにする食欲に聞きたいことは聞き、先生方は学生が何を求めているか分からないから、言われるまで待たないできくことが必要である。しかし現実問題、先生は忙しくなかなか時間がつくれぬという問題もあると述べていた。その他にどんな先生になりたいのかという気持ちで行うという意見も出た。

次に「ボランティアの教室での立場はどうあるべきか」について意見を述べていった。まず先生でもなくお兄さんお姉さんでもないという意見が出た。学生の悩みとしてお兄さん・お姉さんではなく先生として関わることの難しさについてでることが多い。それについて先生方は、「子どもとは線をひき関わっていく。ある時はお兄さんお姉さんで授業では違う」と休み時間と授業でしっかりとメリハリをつけて子どもと関わる必要があると述べていた。また、学生と先生との関わり方についての意見もでた。クラスごとに特色があり、先生に自分の思いを伝えづらく、受け身になりやすいということや気になる子を見てほしいと言われたが何を気をつければよいのかわからなく、自分で考えて関わっていけなければならなかったという意見があった。それに関して、先生は担任との距離で授業をやらせてみる人、掲示だけの人などかわってくると述べていた。また、やりたいことを明確にしてクラスに入ればよいという発言もあった。自由にやりたいことが出来る時なのでいろいろやっておくべきで、失敗してもいいからやってみることが大切である。

次に「学校に行き困ったこと、学生が来てこまったこと」について意見を出していった。ここでは主に先生と学生の関わり方についての意見が多かった。やはり、先生方は忙しく、話

す時間を見つけるのは難しい。また、個人の情報についてもどこまで聞いたらいいのか分らないという意見も出た。学生は情報が少なくどうしたら良いのか分からず、先生側では、指示待ち学生では困ると述べていた。また学校の思いも学生に伝わっていないという意見もあった。

最後に時間がなくなり全員ではないが「学校にあってよかったこと、学生が来てよかったこと」について、子どもたちが笑顔になれる。学生は若さが武器で、それがクラスの勢いにつながるなどの意見が出た。



グループ C

メンバー	大石純詩 (中島中)	石田弘幸 (東中)	田畑諒祐 (教育学部 4 年)
	浦田実和 (教育学部 3 年)	◎村山功 (実践センター)	

トークテーマ：④学校に行ってココが困った／学生が来てココが困った

まず学生が学校ボランティアに行って困ったこととしては、児童生徒との関わり方の難しさ、空き時間の使い方の二点が挙げられた。

一つ目の児童生徒との関わり方については、ボランティアとしてどこまで指導に入っているか、手を出しているのかということである。学級担任や学校の教育方針との兼ね合いもあり学級の環境を変えてしまったり厳しく指導したりすることを躊躇してしまうことがあるということだった。また、知識や経験の少ない学生が喧嘩の仲介や発達障害の支援をしていくことも不安があったようだ。この点について、現場の教員は、年度始めや普段から注意の必要な子どもの問題について情報を共有したり、他学級の子どもへの対応に困った時は担任に相談して判断をまかせたりして対応しているということで、何も情報のないボランティアがパツときたら困ることが多いのは当然であり、児童生徒との関わり方について現場の先生とボランティアがどこまで相談や話をできるかが課題であると述べていた。

二つ目の空き時間の使い方については、中学校で特定の教科指導を中心にボランティアを行っている学生の悩みである。ある程度仕事をもらってやっているが余った時間の使い方が分からないこと、それについて担当の教員に聞きたいが仕事をしていて忙しそうにしていると声をかけづらいということであった。解決策としては、ボランティアに入る最初の段階である程度話し合っておくことが挙げられた。例えば、空き時間は学生自身の勉強(教採や大学の課題など)をしていいよと言っている学校もあり、そのような仕組みがあれば学生も空き時間に何をしたいのか葛藤せずに済む。

次に、学校側が、学生が来て困ったことについては、学生の積極的な関わりが少ないということと、連絡がとれなかったということが挙げられた。

一つ目の積極性に関しては、教員は目の前で困っている子がいても入って行かなかったり全く動かなかったりなど積極性のない学生が多いと感じている。また、学生ボランティアに来て何をしたいのか、という質問に明確に答えられない学生が多いという意見もあった。どこまで入っているのか、手をだしているのかと関わり方に不安を持っている学生と、ここまで支援をしてほしいという学校、教師側の思いがはっきりせず双方の考えが伝わっていないことが課題として見えてきた。

二つ目の連絡については、連絡ができず日課変更などがあつたときに伝えられなかったこと、学生側からの欠席連絡がなかったことが挙げられた。学校側は学生ボランティアの支援も含めて授業や指導の計画をしており、空いたときに学校に行くというよりは次回はいつ来るのかということをお学校側にしっかりと伝えてほしいという意見もあった。計画的に支援を進めるためにも学校と学生との連絡を怠ることはあってはならない。

まとめとして、全ての問題点において学生と学校、教員とのコミュニケーションの必要性が挙げられた。学生は困っていることについて先生と相談や話をすることで悩みがある程度は解決し、次からの活動に生かすことができるため、毎回そのような話をする時間をとることが大切である。コミュニケーションを取らない限り、学生がどのような悩み、希望を持っているのかということも伝わらない。忙しい学校現場では話す時間がうまくとれないこともあるため、ボランティアを始める前の段階である程度まで話し合うことや、話し合いのできる仕組み作りも大切であると考えられた。

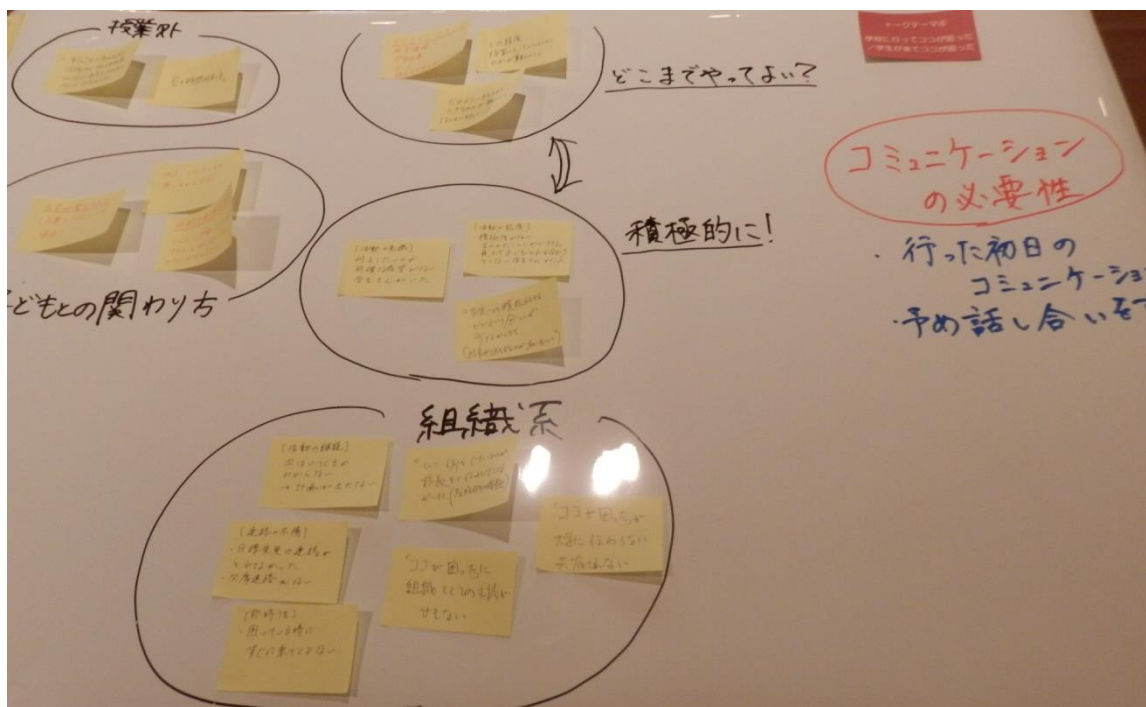
このようなコミュニケーションの必要性ということを受けて、大学側(センター長)は、学生の様々な悩みが大学側まで伝わっていき、悩みの共有ができていないことを大学側の問題としてあげ、ボランティア開始時に学生と学校側が話せる仕組み作りなど、コミュニケーション不足からおこる学生の悩みを大学が組織として解決できるようにしていきたいと述べている。

トークテーマ：⑤学校に行くとココが良かった／学生が来てココが良かった

学生がボランティアを行って良かったことは、教科や教科指導に関する知識・理解が深まるという点と、付属学校以外の学校で教育に触れる経験ができたという点が挙げられた。中学校でボランティアを行っている学生は、実験器具やグラフ等の扱い方が詳しくなった(理科)と述べている。また、県外からの学生は県内の学校は教育実習を行う付属学校でしか経験がなかったが、ボランティアで他の学校を経験する機会をもったことで、視野もひろがり、県内での教員を目指す時の参考になったと述べている。

学校ボランティアをどう教員生活に生かしていくか、というつなぎの部分の支援を、支援センターで充実してくれるようになってきてよかったという意見もあげられた。

教員、学校側の良かった点は、学校の活性化につながるという点と、子どもとの会話や支援が多くできるという点が挙げられた。教員としても、児童生徒にとっても、若い先生が入ってくることが活性化につながるということであった。また、担任の教師だけでは不足しがちな児童との会話や発達障害の児童の支援をしてくれるということもありがたいと述べていた。



グループ D

メンバー	川崎淳子（賤機南小）	堀川力（伝馬町小）	寺澤彰太（教育学部 3 年）
	那須野隼（教育学部 4 年）	◎益川弘如（教職大学院）	

トークテーマ：④学校に行ってもココが困った／学生が来てココが困った

学生が学校に行っても困ったこととして、教員に相談できる時間の少なさ、複数の学級に入るために深い関わりができない点、支援を要する児童に対しての支援の仕方が挙げられた。

一つ目の相談時間については、授業の前にある程度話を聞くことはできたが、授業後にその授業について詳しく聞きたいときに時間を取ることが難しかったということだった。また、学生が実際に授業をさせてもらうこともあったが、その際も授業計画や指導案について担当教員と相談する時間があまりとれず大変だったようだ。

二つ目は、毎週ちがう学級にボランティアに入る学生からの意見で、その時間だけの関わりになってしまい、一人一人と深く関わっていくにはどうすればいいか困っているという意見だった。

三つ目は、支援の仕方についてで、支援の仕方そのものが分からないという意見や、うまく支援できないことで先生の授業を邪魔してしまうのではないかと不安があるという意見が挙げられた。学生は、支援の仕方に正解がない中で、自分で考えたり先生に相談したりしながら支援をしていくことの難しさを感じていた。それに対して、教員からは、授業中に教室から出て行ってしまふような子に対してなんとか教室に戻して状況を変えようとするよりも、まず子どもに寄り添い話を聞いてあげることが大事だというアドバイスがでており、教員の資質として困っている子という意識で子どもに寄り添う教員という姿が挙げられた。

また、学生の今の時期にボランティアを通して失敗しながら悩んだり、肌で感じたりすることの大切さも挙げられており、学校側が学生は学ぶ身だとして多くのことを学んでほしいという姿勢で受け入れているということも分かった。

一方で、学校側からは困ったことが特に挙げられなかった。

また、学校の都合だけで支援をお願いして良いことばかりだったが、学生に学んでほしい、学生の資質を高めたいという意識を持たずに学生ボランティアを受け入れていた、という学校もあり、学校によって学生ボランティアに対する意識のずれがあることも明らかとなった。学生側と学校側のニーズがつながるように進めていくことが大切だと述べられている。

トークテーマ：⑤学校に行ってもココが良かった／学生が来てココが良かった

学生が学校ボランティアに行っても良かった点としては、学びが深まるという点と、子どもとの関わりの中で変化が実感しやすいという点と、教員になるモチベーションが上がったという点が挙げられた。

一つ目の学びについては、現場で先生と意見を交えながらに知識や技能を学んだり、自分の目で見て学んだりすることができたということであった。教員になる前の、学生という視点で

教育現場を見て良い所も悪い所も学んだということだった。また、ボランティアを通して自分を見つめ直し、足りない部分を発見できたという意見も挙げられた。教育実習での経験を生かして学校ボランティアでより深い学びにつなげようとしている学生もいる。

二つ目の子どもの変化については、教育実習と違い、週一回ほどのペースで長期間子どもと関わるため子どもの気持ちの変化や良いところなどが発見しやすくなったということであった。教育実習では期間が短いため全員の変化が見られなかったり、やる気を引き出そうと工夫をしてもその成果が表れる前に実習が終わってしまったりと変化が見づらかったようである。

三つ目はモチベーションということで、ボランティアを通して子どもから元気をもらうなど教師になりたいというモチベーションにつながったという意見が挙げられた。

学校側が、学生ボランティアが来て良かったことは、人手が足りない中で個別の支援をしてくれたこと、子どもと教師の学びが深まったことが挙げられた。

一つ目の個別の支援については、支援が必要な子に対して担任が頼まなくても学生が進んで困っていそうだなということを見つけて対応してくれたということである。また、学生が児童一人一人に声をかけてくれたり、よく遊んでくれたりすることで、子どもにとっては自分のことを気にかけてくれていると感じ、お互いの関係がより強くなっていくため、結果として子どもに好かれ、子どもたちがその日に学校に来るのが待ち遠しくなっているということだった。学校側としては、手が足りない中で担任だけでは行き届かないかない個別の支援をしてくれるということは週一回だけでも、とてもありがたいということだった。

二つ目の学びの深まりについては、学習支援により子どもの学びが深まるだけでなく、教師にとっても学びになるという意見があった。体育の授業で学生ボランティアに実技の実演をしてもらうなど、学生をうまく活用しながら授業を進めていこうとするなかで、学生から学ぶことも多いということであった。

トークテーマ：⑥ボランティアでこんな教員になってほしい

主に、コミュニケーションがとれる教師、一人一人を大事にできる強い教師、前向きに学ぶ教師が挙げられた。

学校ボランティアは、学校側が支援の充実のために利用しているように思えるが、学生がそこから学んでいること、学ぶべきことも多い。他の教師が困っていたら手を差し伸べる姿勢や、時間が少ない中、荷物を運んでいる時などのちょっとした時間を利用して先輩から話を聞くなどして学ぶ姿勢を大事にしながら、学校という組織として動いていることを念頭におき教師間で適切なコミュニケーションをとれる教師になってほしいということだった。

学生側からは、子どもとのコミュニケーションだけでなく、教師間とのコミュニケーションを大事にしたいという意見が挙げられた。また、子ども、保護者、地域に近い教師として謙虚さをもって接していくことの大切さを述べていた。

また、学校ボランティアを通して、子どもへの関わり方を学ぶだけでなく、様々な場面で教師がどのように対処しているのかを見て学び、ストレスや問題に対して対応できる強い教師になってほしいということだった。現場の先生、子どもと接する中で前向きに学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

グループ E

メンバー	石原重幸（東源台小）	小林一隆（南部小）	望月孝太（教育学部 4 年）
	砂川茜（教育学部 3 年）	齋藤朗三（教職支援室）	◎島田桂吾（教職大学院）

トークテーマ：⑤学校に行ってもココが良かった／学生が来てココが良かった

E 班でのテーマは「学校に行ってもよかった、学生が来てよかった」を選んだ。考える時間をつくり、付箋に各自意見を書いていった。発言は望月、砂川、齋藤、小林、石原の順。

学生側からは学ぶことや学校に実態について知ることができたと述べていた。例えば、学べたこととして教師のふるまい方。常に笑顔でいること、怒る時は鬼のように怒る、子どものいいところを見つける、教科の指導法や学習でつまづくこのパターンがなんとなくわかってきた（板書に追いつけず、周囲のざわつきで集中できなくてなど）など出た。また大学の授業や本などで学んだこと実践し、深めることが出来たという意見も出た。学校の実態では細かい学校の様子を見ることが出来た。（職員室でのふるまい方、職員室での子どもへの声かけ）母校でボランティア活動をしてより地域について知ることが出来た。また附属とちがう公立の実態がわかったなど出た。

先生側からは、個別対応が出来ることがあげられた。教師 1 人で全体を見ることは大変でそんな中、学生が来ることで学業不振の子どもに個別に対応できたり、体育など見る目が増えるので安全面で幅が広がったりするなど述べていた。また、基礎的な内容を定着させたい低学年に入ってもらえることができる。さらに週 1 など決まった曜日に定期的に来てくれる計画しやすいという意見もあった。他にも、学校の先生方が若返った、職員が活性化されたと述べていた。

大学の先生からは、実習ではお客さんのようなところがあつたが、ボランティアでは日常を見ることが出来る個人的なつながりができる。社会人として芽生え、（あいさつ、身だしなみ、大人との関わり方）また、学級での話がリアルになり大学の授業が向上したと述べていた。

その後、学生ボランティアを受け入れていない学校の先生から、「不定期に学生が入ることはやくにたたないのですか？こうあつたらボランティアが役立つというのはどのようなことがありますか。」という質問がされた。そのことについて受け入れている先生方は、特別な支援を要する子についてもらうことできる。また授業に入ってもらえるなど述べていた。また、1 人ひとり理解し、子ども理解してもらい教師をめざしてもらいたい。放課後学習などで子どもが納得する教え方を学んでほしいと今後の期待についても述べていた。

次に学生から、この子はどういう子であるか一言始まる前に教えてもらいたいという意見が出た。これに関して先生方は、コミュニケーションを取るようにはしているが先生不足、学力の二分化、低学年の成熟などあり学生と担任が話す機会を計画的にとる時間がない。また具体的には言えていないと述べていた。さらに発達障害の子どもへの対応、支援してくれるので学校側が助けられていることが多いという意見が多かった。今は学校の方が 7:3 で得ているものが多い。学校側は学校と学生の信頼関係や戦力を育てるために連携していきたいと考えている。

グループ F

メンバー	小澤敬（西豊田小）	鈴木陽子（東豊田小）	富坂麻未（教育学部 4 年）
	鈴木扶美（教育学部 3 年）	◎渡邊美恵子（教職支援室）	望月耕太（大教センター）

トークテーマ：③学校支援ボランティアの（教室での）立場はどうあるべきか

提示されたテーマの中で、話しやすさを重視して、「ボランティアの教室での立場はどうあるべきか」に決定した。はじめに付箋を数枚ずつ配り、各自が思いついた意見や単語を書いていった。書き方に関しては、横書きという指定のみで、それ以外は自由とした。各自で考える時間をおよそ 5 分間設けた。

その後、各自がそれぞれ書いたことをホワイトボードに貼っていき、それに関する簡単な説明を加えていった。報告の順番は、鈴木扶美、富坂麻未、望月耕太、小澤敬、鈴木陽子、渡邊美恵子の順。2 人目以降の発表者は、それまでに出了た近い意見や反対意見等、すでに貼られている意見との関係を考慮しながら付箋を貼り、説明していった。

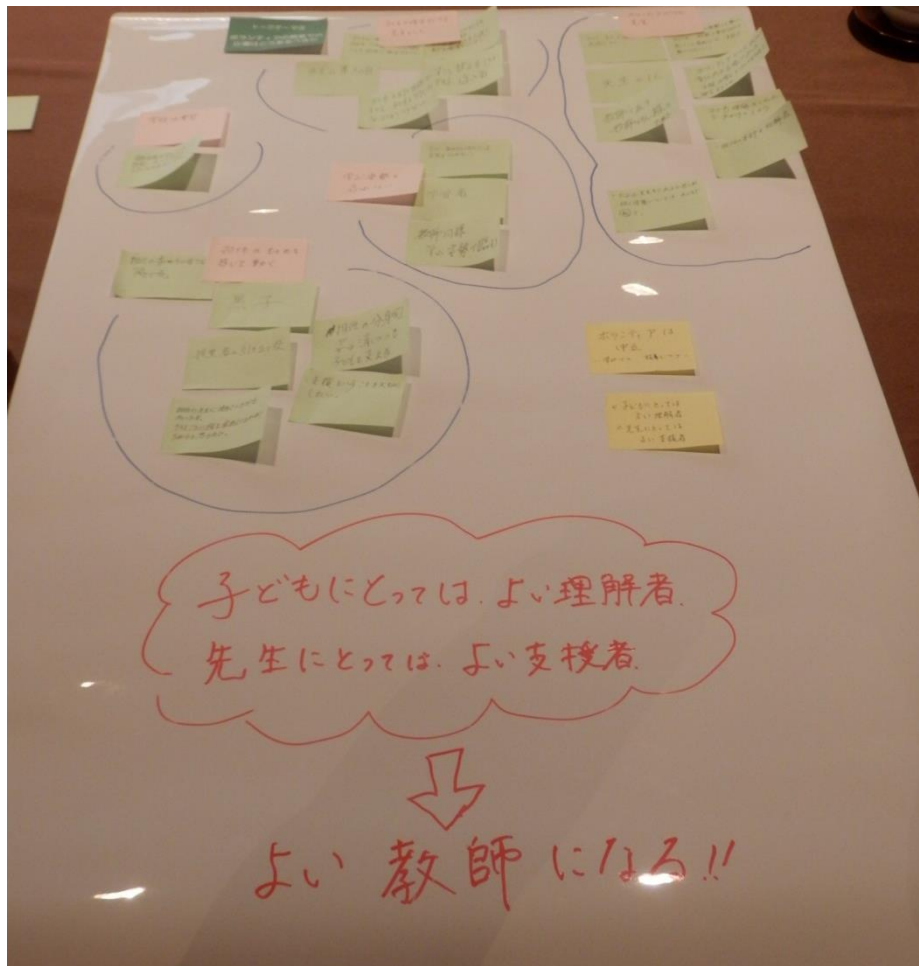
議論では、まず学生側から、ボランティア先の担当の先生には、学生に対して明確な指示や要望をしてもらいたいという意見が出された。配属されるクラスによって、担任の先生が求めていることが違い、学生が迷ってしまう場合がある。同様に担任の先生については、学校が募った支援内容に沿ったことを基本として、担任の先生にも求めてもらいたいという意見も出された。また、子どもへの接し方や態度については、友達感覚やお兄さん・お姉さんといった立場で接してしまうことがあり、教師としての意識を持つことが重要であるとの意見が出された。さらに、学生ボランティアは学ばせていただいているという立場であり、実習よりも先生方の仕事の中身をじっくりと見ることができるという意見も出された。

次に、現職の教員側から、ボランティアの学生は担任の分身的な存在であり、姿を消しつつも授業を支えてほしいという考えが示された。担任にとっては、自身が求めていることを察し、動いてくれるという、「黒子的」な存在であってほしいという。また、学生ボランティアは子どもと距離や感覚が近いことから、子どもにとって少し甘えることができ、ほっとできるような存在であるという意見が出された。そのことから、子どもが相談してくることを親身になって聞いてもらい、場合によっては担任にしっかりと伝えてほしいという要望が示された。さらに、学生ボランティアの立場としては、教師であって教師でない難しさがあるという意見が出された。ただし、子どもにとっては教師同様であり、教師を目指す以上、常に学ぶ姿勢をもって欲しいという。週に 1 回程度しか来ないかもしれないし、必ず決まった時間に来るわけでもないが、ボランティアの経験を重ねてきたら、担任からの指示を待っているだけではなく、担任の思いや求めていることを察して、自ら進んで動いてほしいという。加えて、近年大きな問題となっている個人情報については、秘密を守ることを徹底してほしいという意見が出された。

最後に、大学教員側から、主に学生ボランティアの姿勢に対する意見が出された。まず、子どもにとっての学生ボランティアは、子どもと同じ目線で接することができるが、しかしそれは、子どもと同じになるということではないという。子どものことを十分に理解した上で、その子に

あった声掛けをすることが重要であり、ボランティアの配慮不足で子どもにマイナスの影響を与えないようにしなければならない。また、担任との関係としては、まず重要なこととして、担任の教育方針を理解し、行動することが示された。ボランティアはあくまで支えであり、「黒子的」な存在として教員を補助し、サブ的な存在であるという。「第三の目」として、担任のいないところで見せる子どもの姿をしっかりと見取り、それを担任に報告することも重要である。さらに、ボランティアは「学習者」であり、学ばせてもらうという立場を忘れてはいけないという。

全員が発表し終えた段階で、それぞれの意見の中でまとまりを考えていった。議論の中では、「先生というものがテーマにある」、「中立」、「ボランティアを实践することで良い教師を目指す、ということが学校の狙い」などの意見が出された。議論を総合した結果、学生ボランティアは、「子どもの味方だけど先生である」、「ボランティアだけど先生である」、「学ぶ姿勢を忘れない」、「担任の求めに合わせて動く黒子・分身的な存在」、「学校の要望を聞く」という5つの立場でグループ分けされた。またこれらをあわせて、学生ボランティアとは、『子どもにとっては良き理解者、先生にとっては良き支援者。そして良い教師を目指す』存在であることが示された。学生ボランティアは、中立的な存在であり、学生として学びつつ、教員として指導しつつ、とても難しい立場である。最終的には、子どもにとっては良き理解者、先生にとっては良き支援者という立場でボランティアに参加させてもらわなければいけない。この2つの立場を経験し、良い教師を目指さなければならない。先生方も、学生が良い教師になって欲しいと思ってボランティアを受け入れてくれている。ボランティアは、先生方も応援してくれていることを理解して活動に取り組むべきとまとめられた。



グループ G

メンバー	良知陽子（宮竹小）	酒井宣幸（三保第二小）	押尾妙子（教育学部 4 年）
	滝郁美（教育学部 4 年）	◎鈴木正美（教職支援室）	

トークテーマ：③学校支援ボランティアの（教室での）立場はどうあるべきか

④学校に行ってココが困った／学生が来てココが困った

話を始める前に、大学生 2 人がどのような形でボランティアに入っているかを確認し、2 人とも教師のアシスタント的な立場であることを踏まえて議論を開始した。

まず、学生から「特別な支援が必要な子に対してはどのように対応すればいいか」「子どもたちを指導する上で、学生はどこまで責任を負うべきか」との質問があげられた。それに対して教員側からは「特別な支援が必要な子は個々に違うため、自分の判断で動けないのはしょうがない。先生とコミュニケーションをとって個々に応じた対応を考える。教師間でも動けるように情報交換をしているので、学生が 1 人で悩む必要はない」との回答がなされた。

また、「責任は持たせられないが、責任がないわけではない」、「どこまで介入していいかわからない」等の悩みも付箋には書かれており、教師との連携の仕方やボランティアとしての関わり方が学生にとって大きな問題になっていることが明らかとなった。そのことに関しては、まず、特別な支援を要する子どもに関する情報をどこまで学生に伝えるか、教員側に質問が投げかけられた。それに対して、教員からは「このような診断を受けている、などといったことは個人情報だが、見える範囲で情報を出すにはしている」との回答があった。子どもたちの苦手や特性は共有し、「誰がどのような問題を持っているからその子について欲しい」といったお願いはしている、等の具体的な例もあげられた。また、特別な支援を要する子への支援に関して、ボランティアとしての力が生きる子に付いてもらいたいという意見も出た。長い時間かけないと関係を築けない子どもに一生懸命付いてもなかなか上手くいかない。一方で、色々な人を受け入れながら支援を受けられる子もいるため、そのような子に付いた方が学生の力が生きる。このように、学生が毎週活動に来る中で、一番自分の力を発揮できる子につくことが一番担任としても助かるという。最後に、「子どもに関する情報はある程度提示し、その中で苦手等に対する手立ても教えることで、学生が子どもたちと関わるができる」と、この質問に対するまとめがされた。

責任については、以前「学生ボランティアの手引き」のベースを作った酒井先生に意見をうかがい、「手引きを作成する際に内容として盛り込まなければいけないと感じたことは、守秘義務など教員として気にすべきことだった。」との回答がなされた。個人情報などは絶対に入って来るため、学校に入る以上は学生でも知っていなければいけない。学校現場で起きるものの責任は教員にあり、学生に責任は持たせられないが、だからといって何をやってもいい訳ではないからだ。また、ボランティアの立場については、自分がお手伝いという立場であることをわきまえた上で教室に入り、そこで何ができるか試行錯誤していくしかないのでは、との意見が出た。更に、学生に対して何をしたいか具体的な指示をしてくれる先生が増えれば、学生ももっと力を発揮しながらボランティアに参加できるのではとの提案もなされた。

次に、ここまでの教員側の話聞いた学生から感想が寄せられた。まず、「自分の生かせるところでやる」ことに関しては、学生自身が実際に上手に関わるができない子どもに出会ったとき、自分の声掛けの方法が悪かったのではないかと不安を感じていたため、話を聞いて安心したとの声があげられた。また、「お手伝いの立場」についても、自分のできることが限られているために「これでボランティアができているのだろうか？」と不安だったために安心したとの感想が出された。更に、ボランティアを通して教室の中で必要とされていることを自分なりに推測して動く力が付き、その結果として子どもたちから信頼を得ることができたという経験も語られた。しかし、信頼をされるがゆえに、子どもたちは何でも学生にやってもらえればいいやと甘えるようになってしまうという問題点も同時に指摘された。

その後、学生の話を受けて再び教員側からコメントがあった。「自分の生かせるところでやる」については、将来実際に教員になった際に対応の難しい子に必ず出会うことを考え、その子に学ばせてもらう感覚が大事。今の立場で無理に関わることは無いが、将来同じ場面に出会ったときにどう対応するか、教員の姿を見て学ぶことは大事であるとの助言がされた。また、担任がどう関わっているか見るだけでなく、ちょっとした時間を見つけてその対応に対しての質問をすることも大事だという意見も出た。担任の対応は意図されたものが多いため、聞いてもらうことでその意図も学べるとのことだった。

しかし、聞くことに関しては、学生と教員がそのような話をする時間が無いという問題点があげられた。これは教員側にも問題があると指摘され、特にお昼を挟まず午前中だけで活動を終了する学生に顕著だという。教員と学生が協同作業を行うためには、共有するものが必要だ。そして、共有をするためには話をする時間が保証されることが必要である。

時間に関しては、ボランティアが大学のカリキュラムの合間を縫って行われているものであり、仕方がないが勿体ないとの意見もあげられた。学生はある程度制約された中でボランティアに来ており、来なくても来られないときがある。それを踏まえた上で、ボランティアに対する期待を教員も子どもも持っているということを忘れないでほしい、という要望が同時にあげられた。

まとめとして、学生がボランティアをする前提条件として、それぞれが何をすべきかという議論が行われた。まず、大学側がしなければいけないこととして、学生に対しての守秘義務等を含めたボランティアに対するサービス上の構えづくりの指導があげられた。ボランティアとして協同する以上、学生のサービス上の構えを持たせて送らない以上、信用して協同ができない。また、学校側がしなければいけないこととしては具体性があげられた。学生に対して指示等を明確に行うことで、それが活動のやりやすさに繋がるのではとの意見だった。また、具体的な指示を受けることで学生は安心して活動ができるとの声も上がった。そして、その2者の接点として責任の共有があげられた。もちろん責任は担任にあるのだが、なんでもやっていい訳ではないと学生が心得ておけば、信用して連携をすることができるとの結論に至った。

連携は、教師の資質を向上させる機会でもあるともされた。教師は職人と同じように先輩を見て学ぶ職業である。ボランティアという立場で安心して見て、聞いて、やってみることで、その学びを学生の頃からできる。その意見に関して、学生からは言語化は難しいが教職に対して自信が持てた等の経験が語られ、議論は終了した。

5. ボランティア支援システムの紹介

静岡大学教育学部 塩田真吾

現在、静岡大学教育学部が開発している「ボランティア支援システム」について紹介した。

この支援システムでは、学校・教育委員会と大学生が、要望のマッチングをスムーズに行うことができ、学生の活動のふりかえりを促すことができる。以下には発表スライドの一部を示し、詳細は本報告書の「第3部資料編」に掲載した。

2014/2/4

ボランティア支援システムの紹介

静岡大学教育学部
塩田 真吾

Shizuoka University

ボランティア支援システムの紹介

▶ ボランティア支援システム

学校・教育委員会と大学生が、要望のマッチングをスムーズに行うことができ、学生の活動のふりかえりを促すことができる。

←大学向け(管理者用)ページ
←学校・教育委員会用ページ
←大学生用ページ

2
Shizuoka University

ボランティア支援システムの紹介

教育委員会・学校向け支援システム

- ▶ 教育委員会、学校が要望(時期、人数、内容等)を登録し、**学生とのマッチングを支援。**
- ▶ 学校と大学生とのやりとり(ふりかえり)や連絡など情報の共有を支援。

(教育委員会・学校向け) 基本情報の登録

※大学側は運営者としてすべての登録情報を閲覧可能

Shizuoka University

ボランティア支援システムの紹介

教育委員会・学校向け支援システム

学校の要望の登録
応募状況の詳細

Shizuoka University

ボランティア支援システムの紹介

大学生向け支援システム

- ▶ **学校の要望一覧を検索でき、簡単に応募できることで、学校とのマッチングを支援。**
- ▶ **活動をふりかえりや自己評価などの機能を有し、学校、大学と情報を共有することも可能。**

学校の要望一覧の表示・検索
ボランティア募集への応募

Shizuoka University

ボランティア支援システムの紹介

大学生向け支援システム

ボランティア記録の編集
自己評価の編集

活動のふりかえりと自己評価機能

Shizuoka University

第2節 本シンポジウムの成果（学生の感想）

本シンポジウムの成果として、参加した学生の感想の一部を以下に示す。

1	<p>学生ボランティアとして半年ほど指導・支援をさせていただいていますが、学校側がどう思っているか、学生ボランティアにどう行動してほしいかなどが聞けてとても勉強になりました。来年度もまた学生ボランティアとして入ることができたらと考えています。教育実習とはまた違う経験ができると考えていましたが、ボランティアとして求められることを今日学ぶことができよかったので、まずは今年度中、精一杯やっていきたいです。</p>
2	<p>学校の先生方、大学の先生と学校支援ボランティアについて話し合う機会はなかなかあるものではないので、今日このような機会は本当に貴重なもので、いい機会となりました。学生側が不安に思っていることが、実は教員側も悩んでいるということが分かったし、学生ボランティアが入ることで教師も「良いところを見せよう！」とモチベーションがあがるという話のように意外な話を聞くこともできたので、とても楽しみながら話し合いができました。またこのような機会があれば、ぜひ、参加したいです。</p>
3	<p>今まで何年もボランティアに入ってきましたが、先生方がボランティアについてどのように考えていらっしゃるのかお話を聞くことはなかったので、とてもいい機会でした。やはり一番の課題は、教員側と学生側の情報共有ではないかと、ラウンドテーブルを通して感じました。クラスのきまり、特別な支援を要する子どものことなど、わかっているならば支援することのできる幅は格段に広がると思います。話し合いをもつ時間を子どもたちがいる中でとることは難しいですが、何とか時間を見つけて担任の先生と話をすることで多くの事を学べる気がします。春から教壇に立つことになり、今度はボランティアを受け入れる立場となります。教師として学生に何ができるか、新たな立場からも考えられたらと思います。</p>
4	<p>シンポジウムに参加させていただいて、ボランティアを受け入れてくださっている先生方が、“ボランティア”だけの関係でなく、私たちがよりよい教師になれるように応援してくださっているということが分かり、「もっともっと頑張らなきゃな」という意欲がわいてきました。ボランティアは“先生でいなくては”という気持ちがあったのですが、先生方からみると、「普段先生にはみせない子どもの姿が見られる」、「先生には言えないことを子どもは言いやすい」というように、より子どもに近い位置づけで、私たちを見てくださっていると知り、のびのび活動ができるような気がします。また、先生方はボランティアに積極的な行動を求めていると知ったことも、新たな発見でした。</p>

5	<p>学校支援ボランティアとしての立ち位置は“積極的な黒子”という様に自分の中で論がまとまりました。学校側のニーズとしっかりと理解し、隙間を適切に埋めつつ、自分の学びと深めていく環境作りが学生、学校、大学全てに求められていると感じました。グループの先生から、“ボランティアは修行中なので、教師間のかかわりを中心に学んでほしい”と言われました。今までの自分はそれに関する視点が希薄だったので、もう少し考えてみたいと思います。また、先生は悩むことが仕事ともおっしゃっていました。ボランティアとして悩み、それをどうにかしていこうとする姿勢は、必ず生きてくると思いました。本日は本当にありがとうございました。</p>
6	<p>学校ボランティアをしている学生と、学校の思いのギャップを知ることができて非常に有意義でした。学生の私は、ボランティアなので、何でもやるという意気込みで活動し、また同時に将来教員になる身なので、指導していただきたいという考えでした。しかし、学校側も「ボランティアで来ていただいている」という思いがあり、しかも、教師になるのか分からないので、指導をしづらいというのが本音であることを聞き、私の考えの甘さを実感しました。このギャップを埋めるためには、あらかじめ情報交換などをして、教員になる、ならない、の確認などが必要だと思いました。せつかくの良いシステムなので、行く学校のニーズに応えられるものがないなと思いました。ありがとうございました。</p>
7	<p>もう一度、何のためにボランティアに行かせていただいているのか、私がどう動くことが学校のためになるのか、よく考える必要があるなと思いました。毎週行かせていただいているのに何となくルーチンワークというか作業的になってしまっていたなと思ったので、来週からはもっと積極的に学びにいかせて頂こうと思いましたが、もっと先生方と話せる限りお話をさせて頂くような意識で行かせて頂こうと思いました。</p>
8	<p>実際に教員として学生ボランティアとどのように付き合っていきたいのか、考えが聞けました。学校という組織を再確認して、どのようにその中で過ごしていくのか、そのアドバイスや心構えをきくことができ、大変参考になりました。積極性について、学生、教師の両視点で意見交換できてとても楽しい時間になりました。</p>

第3節 まとめ

本シンポジウムでは、「大学と現場をつなぐ学校支援ボランティアのカタチ」と題して、学校支援ボランティアの高度化を図ることを目的とした。最後に、この目的を踏まえて本シンポジウムの成果を3点述べる。

1点目は、受け入れ先の小中学校の教員が、「学生の学び」についての意識を共有できたという点である。学校支援ボランティアに関する先行研究では、教員の多忙化から、「学生を一部労働力の側面から期待するなど、活動の趣旨とは違った学校側のニーズ」が指摘されていた。しかし、本シンポジウムでの事例紹介①「学生の学びを支える学校支援ボランティアを目指して」やラウンドテーブルでの議論の中で、「最後に『学生は学ぶためにボランティアに来ている』という学生のボランティア参加に対する認識の確認が行われた」とあるように、あらためて受け入れ先の小中学校の教員が「学生の学び」という意識を共有できたということは、学校支援ボランティアの質を向上させるための基盤となる視点を再確認できたという意味で大きな成果であると言える。

2点目は、参加学生が、受け入れ先の学校側からの視点で「活動の意義」を理解できたという点である。ラウンドテーブルにおいて、受け入れ先の小中学校の教員から「勉強ができなかった子どもが支援のおかげでできるようになり、笑顔が戻ってきた」、「毎週来てくれるのを心待ちにしている子どもの姿を見ることができた」などの活動の意義が述べられたことで、学生自身が、自分たちが学ぶだけでなく、受け入れ先の学校にも貢献できているということを理解することができた。また、学生の感想の中には、「ボランティアは“先生でいなくては”という気持ちがあったのですが、先生方からみると、『普段先生にはみせない子どもの姿が見られる』、『先生には言えないことを子どもは言いやすい』」というように、より子どもに近い位置づけで、私たちを見てくださっていると知り、のびのび活動ができるような気がします」、「ボランティアを受け入れてくださっている先生方が、“ボランティア”だけの関係でなく、私たちがよりよい教師になれるように応援してくださっているということが分かり、『もっともっと頑張らなきゃな』という意欲がわいてきました」とあるように、受け入れ先の小中学校の教員と学生が直接話す機会を設けることで、学校側の視点を知ることができ、それがこれからの活動の意欲につながる様子が見られた。

3点目は、大学側の課題が明確になったことである。事例紹介②「先進的な他大学の取り組みについての調査報告」においても大学の果たす役割の重要性が指摘されたが、ラウンドテーブルにおいても、「学生の様々な悩みが大学側まで伝わっていきなく、悩みの共有ができていないことを大学側の問題としてあげ、ボランティア開始時に学生と学校側が話せる仕組み作りなど、コミュニケーション不足からおこる学生の悩みを大学が組織として解決できるようにしていきたいと述べている」とあるように、どのように学生と学校的意思疎通を円滑にはかっていくか、また、学生の学びの質を向上させるためにどのように大学がフォローすればよいかなどの課題があらためて浮き彫りとなった。

今後は、こうした課題をどのように改善していくかを検討し、学校支援ボランティアの高度化を目指していきたい。

(塩田真吾)

第5章 本事業の課題と展望

本事業は、静岡大学教育学部と静岡市教育委員会が連携・協働して、初期教職生活で必要とされる実践的指導力の育成に資する「学校支援ボランティアの指導・評価システム」を構築することを目的とした。本事業における課題と展望について述べる。

1. 大学と教育委員会の連携・協働について

本事業は、静岡大学と静岡市教育委員会の担当者や責任者が、議論や連絡を取り合いながら進めてきた。静岡市での学校支援ボランティアについては、平成18年に静岡大学と静岡市が連携協定を結ぶ以前・以後とも、双方がかかわりを持ってきたが、総じて言えば、事務的な連絡の要素が強かった。今回、双方が、学校支援ボランティアにおける学校現場の現状やニーズ、派遣システム、そして、実践的指導力のあり方や教員養成や教員研修の可能性にまで議論を進めたことは、大きな進展であった。一方で、共に事業を進めることによって、課題も浮上してきた。

大学や教育委員会とも、まず行うべきことは、それぞれの組織や人、機能を生かして、学校現場での学生ボランティアの現状や、学生の活動・学びについて把握することであろう。それを踏まえた上での指導・評価システムの構築が、学生や学校現場にはもちろん、双方にもよい影響をあたえるだろう。例えば、本事業における大学教員による活動校における訪問調査においては、学生にとって学校現場が、以下のような環境であることを確認することができた。

- ・学級の一員として受け入れられる環境
- ・担任の先生と信頼関係を築くことができる環境
- ・先生方の児童・生徒理解・教育方法等を、直に学べる環境

これら活動校の環境は、ある程度予想されていたのであるが、もう少し精査してみると、これらはいくまでも主体的に取り組む学生に用意されている環境であったり、あるいは、結果として学生が自ら切り開いていったりした環境である。つまり、大学における学びや、教育実習を通過した学生が、さらに自発的な学びを高めていくとき、学生によってはこの環境を生かし切れない学生も出てくる可能性があるのである。また、訪問調査では想像していた以上に、学校現場における教職員の多忙化が進行していることがわかった。現場の教員たちは、ボランティアに入っている学生たちに対して、とても感謝をしている。また、可能な限り学生と接したいと考えている。学生からは、放課後に時間をとって、学生と対座してくれる教員の存在や、教員採用試験の体験談やアドバイスをしてくれる教員の報告もあった。しかし、常に、学生の学びまでを意識して学生と接していくことを、現場の教員に求めることは酷である。静岡市の「ボランティアにおける学生の支援」や「実践的指導力の育成」については、上記で取り上げた点（3つの環境・現場の教員の状況）を踏まえた上で、より具体的な方向性が見えてくるのだろう。その意味では、2月に行ったシンポジウムは、学生・大学・教育委員会・学校現場の教員が参集し、じっくりと討論を行ったことはとても有意義であった。本年度は、本事業の告知の意図も含めたシンポジウムであったが、今後、シンポジウムの形にこだわることなく、年に1度程度、議論する機会を継続していきたい。多忙な学校現場から、校長・教頭、担当者、教員に参加してもらったが、派遣の調整を行っている教育委員会、実際に派遣を行っている大学と実直な情報交換、具体的な事例を

紹介し合うことができた。本年度学生たちが行った「振り返り会」と同じく、シンポジウムのラウンドテーブルでは、他校の多様な活動報告や当事者ならではの話が交差し、本活動の質を高め、上での貴重な示唆を得ることができた。シンポジウムでの議論一つ一つは、静岡市における学校支援ボランティア事業における「評価」となっていくだろう。また、本活動にかかわる組織・人が集散して表出されたものは、それぞれのPDCAへとつながっていくだろう。

2. 学生の学びと、活動を支えるシステム構築について

全国の大学で行われている「学校支援ボランティア」での事例や研究においても、学生の学びや、学生の支援に関して様々な課題があげられている。全国の事例や課題、本地域の実情を踏まえ、本年度の静岡市の学校支援ボランティアの事業では、以下の点に重点をおいた。

- ① 学生が継続的に振り返る機会の創出
- ② 主に、大学等の意図的・計画的な教育的関与
- ③ 上記のことを実現するための人的資源や組織の活用

成果としては、学校支援ボランティアの活動の入口から、継続的に、そして必要に応じて学生の支援を続けていくシステムのモデル案が提案できたことである。

本事業を通しての学生の学びや、活動を支えるシステム構築については、主に第3章第2節において、課題も含め記述してきた。学生の学びについては、学校支援ボランティアにおける学生の参加に対する思いや姿勢が形成されていった。同僚性とまではいかないが、学生は、指導や支援、参加や活動における裁量に制限があるなかで、現場の教員と共に活動し、教育現場の魅力にひかれていっただけでなく、協働して教育に取り組んでいく教員のふるまい等を学んでいったのである。また、本年度用いた評価シートに表れた学生の文言からも、学生の学校現場を見る視野の広がりや、自己課題の焦点化する様子が明らかになった。それに伴い、学生が本活動で目指す目標も、回数を重ねるごとに、より具体的になっていったのである。

支援システム構築に関しては、学生が学校現場における体験を、体験したことだけに終わることなく、大学において学生個々が自己の活動を振り返り、また集ってきた仲間と学び合うためのシステムづくりを行ってきた。また、主に振り返り会においては、活動を「言語化」「客観化」する場面を仕掛けてきた。システム構築に関しては、来年度以降も、振り返り会や評価シートを学生の支援・指導の中心に置きたい。一方で、本活動に参加している200名をこえる学生が、システム全体に参加する場合は、改善が必要なところもある。活動の入口における事前指導や意識調査などは、今後も問題なく踏襲していくことができるだろう。試行的に取り組んできた振り返り会については、本年度の積み重ねを大切にしながら、今後、多くの参加者にどう対応するかがとても大きな課題となってくる。期日の見直しや、教育学部教職支援室のスタッフとの連携等により、一層の工夫をしていきたい。また、評価シートについては、本年度、大学での使用に限定していたが、いずれ、学生がシートを記入し、それを学びの足跡としながらも、学校現場においても活用できる方策を考えていきたい。学校現場においては、学生が参加している学校の教員の熱意等によって、その学生の活動に合わせて即自的な指導が行われている。まさしく、学生は実践的な指導を受けていると言える。学校現場においても評価シートの意図が、学校現場の教員にも共有され、その活用が進むことも期待したい。また、本活動の参加者は、基本的に3・4年生であり、学生の卒業後の教職への入職を意識した時に、本事業では、先行して大学と教育委員

会が協働して「教員初期スタンダード」を策定する計画であった。しかしながら、本活動の大学教員の複数回の訪問調査や、振り返り会の内容検討等を進める中で、まずは学生が自己評価するための評価シートを作成し、その評価シートを分析し、入職 3 年目までの教員が求められる実践的な指導力を見通した「教員初期スタンダード」を策定するという手順をとることとした。来年度は、教職支援室の実務家教員の協力のもと作成した「初期スタンダード」を指標として、多様な学生の資質能力を客観的・実践的にとらえ、今後の学生の指導に生かしていきたいと考えている。

3. まとめ

支援システム構築を目指してきた本事業であったが、静岡大学・静岡市の学校支援ボランティアの一番の強みは、本活動に主体的に、自発的に参加している学生たちである。学生個々の成長は、最終的に、学生がどう自律し自分自身の学びをつむいでいくかにかかっている。そのための大学や教育委員会、そして学校現場との連携も、意図をもって引き続き行っていきたい。教育委員会においては、効果的・効率的な学校現場と大学との橋渡しに対する体制づくりをさらに進めていく。大学における支援においては、特に人的資源の充実・確保も大きな課題となる。また、本事業で力を入れた振り返り会や評価シートが、学生の学びに寄与しているかどうかは、学生の振り返り会での様子や評価シートの文言を、より丁寧に分析していくことが求められるであろう。大学が力を発揮できる場所である。さらに、学生の学校現場での教員養成のあり方を意識した時、事業に関わる全ての組織がよい関係を保ちながら、学校現場での「即自的・実践的な学び（学生自らや、担当教員から）」はもちろん、大学における「(実践的な学びの) 振り返り」「アカデミックの学び」との往還や関連についても確認をしていく必要があるであろう。今後の事業の中で、着実に取り組んでいくことが求められる。

(山本真人)

おわりに

教員養成をめぐり、この十年余りの間にめだつた変化の一つとして、「実践的指導力」への志向や、それとも連動した「学校支援ボランティア」の急速な広がりを挙げる事ができます。教育職員免許法に定められた「教育実習」等とは異なり、各大学・学部が独自に特色を持たせた企画をうち出したり、地域や教育委員会との新しい連携を追求したりすることができる、またそうすることが求められる新たな領域として、「学校支援ボランティア」に熱い視線を注ぐ向きも少なくないようです。私達、静岡大学教育学部にあっても、この「学校支援ボランティア」について深く研究してみようという機運が一部で高まってきていました。たとえば、全国的に、この領域はどのような広がりや傾向をもって展開されているのか。あるいは、この領域において、大学・学部が学生の「実践的指導力」育成をめざす「教員養成ニーズ」と、学校現場が貢献・支援を求める「教育活動・業務ニーズ」とを、どう折り合わせていくべきか。さらには、学生のボランタリーな「自発性」を尊重しそれに委ねる方向性と、「省察」の実をあげるべく大学・学部が責任をもって指導・関与する方向性とを、どのように調停したらよいか……。そういった諸課題について、共同で検討する作業もはじまりつつありました。

そのような時に、静岡市教育委員会のご協力をいただいて本事業の委託を受け、協働してとりくむことができたのは、大変ありがたいことでした。私達は、一年間という期間にしてはやや欲張り気味に、いくつもの作業にとりくみました。静岡市内の学校および教員の皆さんを対象に「学校支援ボランティア」に関する質問紙調査を行ない、実際のボランティア学生の活動・連携・学習の状況に関する実地調査や、他大学の先進的な実践事例に関する聴き取り調査の成果等と合わせて、「学校支援ボランティア」の指導・評価システム構築に向けた参考情報として整理しました。また、改良を重ねたふり返しシート等を駆使して、ボランティア学生達の「省察」を深め、評価しようと試みました。さらに、2月にはシンポジウムを開催して、知見の共有をはかるとともに、学校関係者・学生・大学関係者らによるラウンドテーブルによって「学校支援ボランティア」をめぐる諸問題を掘り下げました。入職後3年間程度の勤務を支える資質能力を示す「教員初期スタンダード」については、すべてに先行して検討・策定するというよりも、以上のようなプロセスを重ねた末に、その素案的なものを提案することになりました。短い期間にバタバタと駆け抜けた感が強いですが、これらの成果と残された課題について、改めて整理しながら今後活かしていきたいと考えています。

本事業にあつては、多くの皆様方にお力添えをいただきました。まずは、シンポジウム

でのご挨拶を本報告書にも掲載させていただいた教育長・高木雅宏先生をはじめ、本事業の共同主体となって下さった静岡市教育委員会の皆様。とりわけ学校ボランティアご担当を中心とした学校教育課の皆様には、日頃ボランティアの実施にご尽力いただいているのに加え、今回は様々な調査やシンポジウムその他に関しても様々な力強いお支えをいただきました。また、日頃ボランティア学生の受け入れやご指導をお願いすることも多い静岡市内の小中学校の先生からは、校務ご多用のところ質問紙調査へのご回答や、訪問調査をめぐってのご理解・ご協力をいただきました。さらに、訪問させていただいた佛教大学、島根大学、大分大学のご関係の先生方からは、時間を惜しまない貴重な知見のご教示をいただきました。残念ながら本報告書の執筆には間に合いませんでしたが、奈良教育大学のご関係の先生方にも、年度末でご多用のところ訪問をお許しいただき、先進的な事例のお話を聞かせていただきました。シンポジウムに参加された先生方や学生の皆さんからは、特に後半のラウンドテーブルで貴重なご意見と熱心なご議論をいただきました。慌ただしく作成した本報告書が、どこまでそれらのお力添えを活かしそれに応えたものになっているか、心もとないところもありますが、足らざるところは今後の「学校支援ボランティア」に関するさらなる検討作業と改善、教員養成への貢献を通してお返ししてまいりたいと思います。ご協力に深く感謝申し上げます。

静岡大学教育学部 菅野 文彦